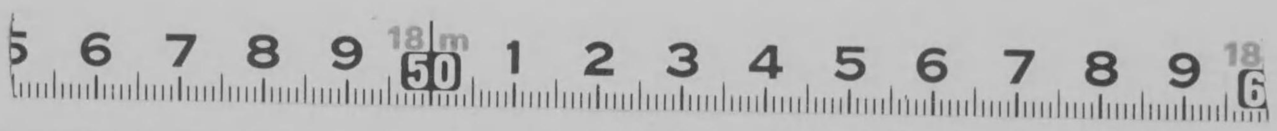
5 6 7 8 9 18 m 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 6

投口

360

9.9.10

36
111

應用心理研究會々長 宇根義人著

進歩したる催眠術簡易應用法

東京 岡村書店刊

360-111

應用心理研究會々長 宇根義人著

進歩した催眠術簡易應用法

東京 岡村書店刊

大正
4. 6. 10
内交

序

物質的文明は今や人類をして空間までも支配さするに及んだ、盛んなりと云ふべきである。

此の時に當つて精神的進歩の觀るべきもの亦必ずこれに伴隨するもの、無からう筈が無い。催眠心理の如き此處に第一に數ふべきものであらうと思ふ。

本書は一小册子ではあるが、進歩した

る催眠心理を尤も解り易く説き、何人も直ちに其の應用を得て、種々なる奇現象の解決より各種疾病の治療、惡癖の矯正器は云ふまでも無く、進んで各自身心の健康を計り、亦各種職業上に應用して、直接間接多大の利益を收め得らるゝは勿論、尚何時如何なる場所如何なる時を問はず、催眠術とし、又心理の應用として交際上の應用を第一として男女各人處世

上に之を應用して無上の幸福と快樂とを享受し得らるゝ樣、其骨子より出來得る限り詳說したのである。

されば本書を研究せらるゝ諸子は、これに依つて上記の快樂を得、また幸福を享受し得らるゝことを、著者は確く信ずるのである。

尚拙著催眠術自由自在を參考として並せ讀まるゝに於ては、更に〳〵其度の深

厚なるを確證することを附記して置く。

大正四年ゆく春の

旅中　岩代飯坂温泉場に於て

著者識

著者　宇根義人

進歩したる催眠術簡易應用法

目次

一　緒言……一

催眠術に對する一般の誤解……催眠術は斯くの如く平凡事のみ……古代に於ける催眠術觀……催眠術と人生との關係……最近世界各國に於ける催眠術觀……本邦帝國大學其他專門學校等に於ける催眠術の講義……催眠術の應用……應用の範圍は如斯し……著書と本書……其他

二　古い催眠術……四

メスメル以前の催眠術……メスメル時代七十年間の催眠術……其後の催眠術……各種學說等の續出……ナンシー派の出現……其後の催眠學說の狀況……暗示說の價値

此書ハ
催眠術ノ實行出來ル書

三　現今の催眠術……七
暗示說の全勝……心理作用說……暗示說即ちナンシー派……ナンシー派と世界の學者
四　催眠術の骨子……八
骨子とは何か……研究家の希望と本書の主意……以前の施術は寧ろ睡眠術……豫期作用と暗示……其他
五　豫期作用……一〇
普通平常に於ける豫期作用……豫期と實現……惡夢豫期作用の實例……著者の惡夢を去りし實例……豫期作用と忘想病……著者の治療中に見たる豫期作用の實例……尙平常に於ける豫期作用の實例……實話實例は甚だ多大なり
六　暗示……一六
人間の暗示に感應する所以……自然の暗示……社會の暗示……暗示の感應

は人に限つて異る……暗示と催眠術……催眠術名稱起原の說明……研究家と催眠術の概念との關係……著者の讀者に與ふる注意
○七　施術に際しての準備と設備……一〇
準備設備と催眠との關係……施術と場所……施術と時……施術と光線……施術者自身の心得……施術と被術者の精神活動との關係……初學者と施術上の條件……其他の注意
○八　暗示の活用法……一三
暗示の主要なる理由……暗示即ち催眠術……暗示法と音聲……暗示法と音調……暗示法と斷言……暗示と被術者の注意……暗示者の態度……暗示と反復……暗示活用上の注意と說明……各暗示法と其効果
九　暗示の有効なる理由……二九
暗示と感應……暗示と年齡……暗示と施術者の位置……暗示療法と精神療法……暗示は暗示者の巧拙に依つて効果を異にす……普通の暗示と感應の

實例……其他

十　これ又施術者として重要なる事項……三三
研究と注意……注意の多少と其結果……注意と諺……著者の教授法……注意は、如斯く重大事件なり……其他

十一　精神と肉體との關係……三六
一致並行……身心相關……精神感應と肉體……肉感と精神……人間不死の靈藥は今や精神的に求められんとす……其他

十二　驚く可き精神力……三八
驚く可き精神力の實例……著者が少年當時の實話……眞に驚く可きは精神力なり……帝國の戰勝と精神力……大和魂と精神力……歐洲の某學者と驚くべき精神力の實例……其他

十三　施術者實力養成法……四一

實力養成の必要なる所以……自己催眠の應用……勢力昇進と性格展開法……讀心術の修養……觀察力の修養法……其他

十四　豫期作用の利用法……四五
施術と豫期作用……豫期作用を起さする方法……確信と豫期作用……信用と豫期作用……其他の利用法

十五　施術法の實例……五一
動物磁氣說の主唱者メスメルの施術法……パスとバケー……神經病的說の主張者シャコーの施術法……暗示說の代表者ベルンハイムの施術法……生理的施術法……生理的施術法も亦効果ある理由

十六　施術の秘決……六三
前說の總括說明……抽象的說明と注告……施術と時所位……其他

十七　各種催眠施術法……六六

普通催眠施術法とその詳細なる説明……興味多大なる反抗者催眠施術法……其他の各種施術法……本書の目的と其説明

各種應用法

十八　疾病治療に於ける應用法……八七
應用の手段方法と主義方針……病氣とは何であるか……神經衰弱治療上に於ける應用法……應用法の詳細なる説明……ヒステリー治療と其應用法……應用と各種の注意……リウマチス治療と其應用法……注意すべき諸項と其説明……其他各種の疾病と其治療應用法……催眠術治療に適當なる病名の列擧

十九　惡癖矯正に於ける應用法……一〇
癖の數と診……癖とは何ぞ……癖の種類と催眠術……遺尿癖の矯正と其應

用法、並びに効果……著者の經驗……應用と其注意事項……喫煙矯正と其應用法、並びに其詳しき説明……著者の實驗談……吸入物中止と其後の結果如何……著者が少年當時の實見談……吃語の矯正と其應用法……吃語の精神的なる理由其他……其他の各種癖の矯正法

二十　神秘不可思議奇々妙々なる事物現象の解決に於ける應用法……一三八
人間の好奇心……好奇心と不思議……解決心の慾求……神佛の靈驗ある理由とその解決法……靈驗とは何ぞ……これ即ち靈驗たり……幽靈とは何か……古來の想像幽靈、並に其形其聲其樣子……幽靈を催眠術に依つて自由に現はす法……幽靈と談話をする方法……著者の見たる幽靈（深夜獨行高山に至るの途）……座ながら千里の遠き事實を識る方法……喰はずして滿腹し、飲まずして醉ふ方法並びに其自在法……キリストと前記の方法

二十一　幸福增進策として家庭に於ける應用法……一七四
疾病治療……疾病豫防……調育と應用法……智育と應用法……家庭に於け

る應用上の特別なる注意事項……其他

二十二 相場成功策としての應用法……一八一

相場の成功は催眠術の應用に有る乎……天眼通、千里眼と相場……著者の實驗談、並びに著者の天性……本間翁が相場成功の理由……將來の大有望……希望と讀者諸君へ

二十三 精神修養に於ける應用法……一八九

精神修養とは何……催眠術と精神修養……催眠術研究と自然敎得の効果……精神修養上斯くの如き益あり……其他

二十四 興味多大なる技術としての應用法……一九三

多數の應用實例……宛然被術者は器物機械の如し……汽車旅行、空中旅行其他多數……半身催眠局部催眠其他應用の實例……特に興味ある應用法……著者の某女敎師に試みたる實驗談……興味の多大なること言語に盡せず……其他

二十五 一般交際上に於ける應用法……二二

催眠術を研究すれば如斯交際法に上達す……交際法の上手下手と幸不幸……其他

二十六 人生の最大幸福を得るは催眠術の應用に有り……二四

大なる幸福とは何……健康、安全、金儲、其他と催眠術の應用……催眠術の應用者は斯くの如く幸福なり……催眠術の人生に缺く可からざるものたる理由

二十七 最も安全なる覺醒法……二九

覺醒法の安全とは何……覺醒法と殘續暗示……覺醒法と各種注意……安全なる覺醒法の實例……其他

二十八 結論……二七

目次終

讀者の研究心と本書……催眠術と其害……人間生活と凡ての科學……汽車と殺人……著者の讀者に對する希望

進歩したる催眠術簡易應用法

宇根義人著

緒言

催眠術と云ふと何か一種の魔法でもあるかの樣、又は不思議の事でもあるのではあるまいか、とまだ多くの人々が思つて居られる樣であるが。現今の催眠術は決して不思議なものでもなければ魔法じみた怪しいものでも恐ろしいものでも無い。悲しい話しを聞いて泣き、滑稽なものを見て笑ふのと少しも異つた點は無いのである。滑稽なものを見て笑ふのが不思議で無く、悲しい話しを聞いて貰ひ泣きをするのが怪しくも恐ろしくも無いとすれば、催眠術で種々なる

奇現象を實現さるゝのも、怪しくなく恐ろしく無いと共に又不思議でも何でも無い、と云ふのは共に人間の心の作用であるからである。然し乍ら數十年乃至數百年前の催眠術は、勿論名稱も催眠術とは云はれても居らず、又一般の人々が其理由を知らぬ斗りで無く、行ふ人其ものすら出來得る事は出來得ても、其何の理に因つて行ひ得るかも明白で無かつたからであつた。從つて多くの人の注意をも受けず、又餘り一般の人々から重んぜらるゝ事も無くして長い間細い〻糸の樣な生命を持つて續いてゐたのであつた。

◎然し乍ら凡ての科學の進歩と共に識者の注意を延き、吾々人間の生活と密接なる關係を有し輕視すべからざるものであると云ふ事を認めらるゝと共に、世界各國の識者學者に依つて最近三十年來の如きは非常なる勢ひを以て、眞面目と熱心とを以て研究さるゝに至つたのであつた。其結果として現今に至つては、

確然たる科學的基礎の上に成立つて、既に我邦の如きも、帝國大學の文科、醫科等を初めとして、各專門學校等に至るまで、それ〴〵其道の學者に依つて講述さるゝに至つたのである。斯くして個々の經驗に依つて行はれつゝあつた醫術が現今の科學の上に成立した醫術となつた如く、催眠術も愈々長い間の幼稚な研究と應用から離れて、新しい研究の結果又進歩したる應用の時代を迎ふるに至つたのである。

斯うした進展の產物として其應用に至つても、我邦の如きも、人口二三萬以上を有する都會には、至る所催眠術治療所等の設立さるゝを續々として見るのである、けれども未だ幼稚なる應用に過ぎずして多くは其範圍も疾病の治療惡癖の矯正等に止まつて居るのであるが、催眠術は元來そうした意味に於て人間生活と關係を有して居る計りでは無く、何れの所、何れの時を問はず、各種

々なる人間生活と密接なる關係を有して居るのである。なれども未だ多くは研究中に屬するを以て各種々なる應用等に至つては、既に公表されて居る部分としては眞に尠なく、殆んど皆無と云ふも過言ではあるまいと思ふ。從つて著者の如きも未だ其應用を述ぶるなどとは、餘りに潛越の感無きでもないが、此所に初學者の爲めに、進歩したる催眠術と、並に其各種の應用法とを述べて、本書を作す事としたのである。

扨是れより愈々本篇に說き及ぼすのであるが、先づ順序として、催眠術の歷史とも云ふべきものゝ大略より初めて、次第に現今の催眠術を述べ順を追ふて各其應用に說き進める事とする。

古い催眠術

今より二百四十年計り以前の事、彼の有名なメスメルが動物磁氣術と云ふ名稱の下に、一種の催眠術を行ひ出した以前の催眠術は、其名稱も催眠術とは無論呼ばれても居らず、亦殆んど統一された、何々と名稱を附せられる程のものでも無く、先天的にそうした一種の或る力を有したと云ふ自信のある人に依つて、豫言とか治療とかと云ふ樣な事が僅かに行はれてゐたに過ぎ無いのであつた。

處が今より二百四十年前彼のメスメルが動物磁氣と云ふ名稱の下に種々なる患者を集めて、一種の催眠狀態を作り、疾病の治療に從事するに至つた。けれども其當時に於ては更にまだ心理作用であるなどゝ云ふ事は何人の考へにも浮かばなかつた計りか、夢にすら無論見ないのであつたらうと思ふ。斯くして識者の注意を延き起したが、そうした不可解の間に約七十年間を過ぎて了つた。

其後最近三十年前までの間は、再び混亂した研究の時代となつて、或は一種の病的狀態が催眠術の狀態であるとか、又は第二自我の實現だと云ふ自我說だなどゝ云ふ樣に種々なる學者の研究と共に種々なる說が唱へられて、殆んど纏つたものともなつてゐない有樣であつた。然るに佛蘭西ナンシーと云ふ所の醫師リエボーと云ふ人が、暗示說と云ふ說を唱へ出して、催眠術は施術者の暗示に依つて、被術者の心作用を動かし、斯かる種々なる現象を呈する事が出來得るのであると稱して以來、殆んど暗示說の全勝と云ふ有樣となつて、他の說は恰も顧みる者さへ無いと云ふ有樣となつたのである。勿論現今と雖も全然其暗示說計りを以て催眠術を行はれ得るものと云ふ者ばかりでは無い、他にも種々なる說を唱へてゐるものも無いでは無いが、殆んどそれ等は取るに足らぬものであつて、要するに心理作用の一部を捉へ來つて、これが催眠術の行はるゝ理由であるなどゝ云つて居るに過ぎない樣なものである。

然らば

現今の催眠術

は如何なるものであるか、次第に順を追ふて述べ進める事とする。

斯樣な次第で、何等の統一も無ければ、科學的根據も無く、不可解不可思議と云つた風で、一種の魔術視せられて居つた催眠術も、有力なる暗示說の發見唱導さるゝと共に、此處に初めて發展の氣運に會して、世界の學者の殆んど全部と云ひ度い人々が、恰度踪跡を暗ましして逃げ失せた爲めに探してゐたのが其人が見付つたと云ふので、一時に其方面に向つて進み出したと云ふ樣な勢ひで見付かつた光明に突進したのであつた。

斯くして暗示説の眞價は益々發揮さるゝに至つたのであるが故に、殆んど催眠術と云へば、暗示説と云ふ可き有様と成つた、現今の催眠術なるものは即ち此の暗示説とも云ふべき一名ナンシー派の主張であつた心理作用説を云ふのである。（ナンシー派とは、リエボーなるナンシーの醫師に依つて主張された爲めに其名稱を付せらるゝに至つたのである）。

是より愈々現今の催眠の内容に立至つて説き進めるのであるが、本書は主として各種々なる應用を述べんとするのである故に、極めて重要なる

催眠術の骨子

より説き、讀者諸君に手取り早く、催眠術を知り且つ行ひ得て、種々なる應用を爲し得る様述べる事とする。

扨然らば、何が催眠術の骨子であらうか、先づ研究者としては、第一に被術者をして直ちに催眠せしむる事を求むるは理の當然であらう、又同じ催眠せしめ得るとしても、以前の如く三十分も一時間もの長い時間を要して漸く催眠する事を得る様な事は無論望まれまい、處で以前の催眠術であつたならば、勢い短かくも數分時、長ければ四五十分から一時間餘も費さなければ、施術し得ないのであつた。何故かと云ふに、以前の催眠術は、催眠術と云はんよりは寧ろ睡眠術であつたので、恰度、お定まりの説教のながつたらしい文句を聞いて眠氣を催して來た、それで眠る様なものであつたからである。斯う前置きをしたならば讀者諸君も又定めし眠くもならうとこれより愈々其骨子中の骨子[illegible]いて見よう。

現今の催眠術にして、又普通に云ふ處の催眠術なるものは、所謂[illegible]の精

神の豫期作用を利用して、暗示に依つて、被術者の身心を左右し、種々なる普通の人々の不可解の現象を實現して狀々なる事實の實驗を爲すと云ふのであるされば此の被術者の豫期作用を利用する事と、並びに暗示とは現今の催眠術、否古今の催眠術を通じて尤も重大なる要件である。是れより第一に豫期作用の如何なるものなるかを說き、次いで暗示の說明より、次第に其利用活用の方法等に說き及ぼすであらう。然らば

豫期作用

とは如何。

豫期作用とは、人々が此處に何事かを其心に豫期してゐると、大底其豫期した事實が現はれて來る。是れを云ふのである。すると、豫期作用とは、例へば

自分なら自分が、明日は彼の賑かなお祭りへ遊びに行くのであるから、何か拾ひものでもするであらう……などと豫期して居て、其翌る日、其お祭りに出懸けて行くと、多額のお金の這入つた財布を拾ひ取つたとすれば、それも豫期作用であるかと云ふに、或は是れ、精神の潛在活動云々など引出して說き及ぼしたならば、全然然らざるものとも云ひ得ないけれども此處に云ふ、又普通云ふ處の豫期作用とはそんなものではない。

次ぎの事實は我邦の如き、各地至る處に行はれつゝある事實であるから、第一に例を引いて說いて見よう。

夜間眠りに就くに對つて仰臥した節（又は仰臥せずとも）胸部に手を當てゝ眠ると恐ろしい夢を見る、と云ふ事を云はれてゐるが果して其通り恐ろしい夢を見るのである、又其恐ろしい夢を見無い樣にする方法として、一般に多

くは、親指を一寸噛んで眠ると云ふ事が行はれて居る、かこれも果して其通りにすれば恐ろしい夢を見る事は無い。(但し此の事は前後共に、それを信じない場合に於てはそうした結果を見ないのである)。

是れは即ち云ふまでも無く二つの豫期作用の實例である。前者は、斯くする時は必ず恐るべき惡夢を觀ると云ふ事を豫期した結果として恐ろしき夢を見たのであり、後者は又斯くせば必ずそうした恐ろしい夢を見ない、と信じて心に豫期した結果として更に恐ろしい夢を見なかつたと云ふものである、此の事實に關しては著者なども實際幼時から數多の經驗があるのであるが、果して其通りであつた。處で催眠心理、否既に普通の心理學から、精神の豫期作用なるものゝ研究の初めに於てこれも、所謂豫期作用ではあるまいか、と云ふ疑問の起つたので、經驗して見ると、果して豫期作用であつた事をも悟つたのであつた。

又此處に斯う云ふ例もある。

嘗て著者が或る田舍の寺院に在つて、毎日數多の患者を治療してゐた其折の事であつた。患者の中に、

『私は何時も靜座して居ますと、忽ち睡氣を催して來ますが、其睡氣と共に又二三尺計りの人形の樣なものが私の周圍を取卷いて私を責め立てますので、私は困しくつて堪えられませぬから、何うか先生これを治療して頂き度いものですが如何でせう?』

斯う云つて來られた患者があつた。依つて著者は、第一に其人の身の上話しを聞く事にした、長々しい身の上話しを聞いて見ると直ちに此の患者は精神の豫期作用に依つて斯かる現象に困しんで居ると云ふ事實が解せられた。と云ふのは、次ぎの樣であつた。

其患者の祖先は武家であつて、又多數の罪人を刑に處した事があつた、其爲め子孫である吾々にまで斯うした報いがあるのではあるまいか！　と云ふ疑問をその患者が語つたからであつた。

そこで著者は直ちに其患者を催眠狀態に入れると共に、機を見て、斯かる事の今後必ず無しと云ふ事を斷言すると共に、貴下はそうした何でも無い事を、心の中にそれと豫期したからであつたと、其不合理の事實を懇々と說き示したのであつた。處が果してそれが豫期作用の結果であつた其爲めに、其後は更に其患者に於いて斯かる事實は無いのであつた。

又暗夜の旅などに於ては、何人もよく經驗する處であるが、何等かの重大事件の爲めに他事を想ふの暇無くして進行すれば如何なる場所を通過するも更に淋しい感じも無ければ恐ろしい感概も浮かばぬが、若しそうで無く、ぶら〳〵

と歩んで行く時などは、必ず何等かの淋しみなどを想ひ浮べて次ぎから次ぎへと、其淋しい感じを辿つて行くのである。

此れ亦豫期作用の一種であるのだ。何故かと云ふに、前に於ては何等の淋しい事恐るべき事など心に豫期しなかつた結果として淋しくも無ければ恐ろしくも無いのであるが、後の場合に於ては、アヽそうぢや、此の邊は何うも淋しい處だな、などゝ精神に其恐怖を豫期する結果であるからである。

尙此の豫期作用に關しては、數へ來れば其實例のみにても此の一小冊誌の全部に亘る位の材料等もあれど、他に未だ重要なる事項も多く且は斯かる一部分の說明は無益の事であるからして、實例其他に至つては拙著催眠術自由自在を見られ度く、此處には直ちに、

暗示

とは如何なるものかを說き、次第に其應用利用の方法等に述べ進める事とする。

『人間は感情の動物である』とは何人も度々口にされる事共であるが兎に角人間は、精神生活にあると共に、其中特に情に生きて居るものであるが、其情なるものこそ、暗示の受入口であるのだ、春の山野の暢々たる秋の自然の淋しい趣き、夏と云ふ熾んな狀、或は冬の荒寥たる風概に接して、何人か其時々の感想を異にせぬものがありませう。必ずや人に依つて其感想を異にするとは云へ各々種々なる感興感想を經驗するであらう、又世界の戰亂を耳にし、或は戰捷の佳日に接して何人か其時々の見聞と共に湧き來る感想を經驗しないものが有りませう、必ずや種々なる感概にうたれたであらう。是れが即ち暗示に感應し

たのである。前者は人間が有情の動物として、自然の暗示に感應した所以であり、後者は即ち、社會的生存物としての人間が、所謂社會に起り來つた暗示に觸れて感應した結果であるのだ。

尙例をひいたなれば、お定まりの說教を聽いてゐて睡氣を催して來ると云ふのも、其說教の一部分でなく、連續的の全體の暗示が、遂に聞く者をして睡氣を催させる處の暗示となつたのであつた。他人の悲しい話しを聞いて同情の念禁ずる不能、遂に共に涙にくれると云ふのも、他人の發した暗示に依つて斯くは貰ひ泣きまでするに至つたと云ふ、所謂これ又暗示感應の結果であるのだ。

（序に此處に說明を加へて置くが、催眠術は心理作用であると云ふのは此れに見るも明白な事實であらう。）

然し乍ら暗示は斯くの如きものにして暗示感應の結果もほゞ前述の如きもの

ではあるが、催眠術上に云ふ暗示なるものは、施術者が殊更に被術者をして一種の催眠狀態てふ眠りに入れ、且は種々なる疾病の治療其他單に目的の下に發する處の暗示なのである。然らば其暗示なるものは、如何なるものであらうか。此處にくだ〳〵しく說明せず共、次第に說き進めると共に了解さるゝ事實である。

此處に又暗示說明に引續いて簡單に催眠術と云ふ名稱に關して說明して見よう。

催眠術を讀んで字の如しとすれば、即ち眠りを催す術であるが、現今の催眠術なるものは寧ろ其名稱も催眠術と云はんよりは、暗示術と稱し度いのである何故かと云ふに、催眠術では人を眠らせる、けれどもそれは只大部分を成してゐると云ふに過ぎずして、決して眠らせる計りを以て、催眠術では無いからである。施術者が暗示を發して、それに被術者が感應すれば、これ即ち催眠術の行はれたるものと云はれる。兎に角、催眠術と云ふ名稱は、數十年前某る人の唱へ出されたそれに因して他に適當な名稱の無かつた結果、一般に用ひらるゝ事となつたのであつて、決して千古不變と云つた樣な、確然たる名稱では無く云はゞ、一寸一時間に合せに付せられた呼び名に過ぎないのである。若し他人から催眠術とは何であるかと云ふ樣な質問に接した時斯く〳〵のものであると云ふ說明が出來得なかつた樣な場合があつたとしやうか、甚だしい術者の不利を來たす故に先づ心得置くべき事項の一として此處に說明して置くのである、其不利益云々の如きは、本書を讀み進めるに從つて自から了解するに至る事故敢て此處に說明の要を見ないのである。）

尙次ぎには、此れ亦施術者として心得べき事項の一として、

施術に際しての準備と設備

とに關して少しく述べる事とする。

勿論著者の説かんとする催眠術施術に於ては大底の場合に於て更に設備も要らぬ、準備も要せぬのではあるが、尠くも其精神、其理由だけは心得置くべき事項であるからである。

普通の施術に於ては尠くも次ぎの如き準備設備等の狀件を要するのである。

（一）場所は成る可く靜かなる所を要す。

と云ふのは、若し騷がしい場所であつたとすれば、自然被術者の心は散亂して各種々なる事物に注意が奪はれる結果、施術者にのみ向けしめんとする注意は殺がれて心意集注精神統一が行はれ惡くい爲めに、勢ひ施術に困

難を來すからである。

（二）時は成るべく、被術者の精神の安靜なる時なるを要す。

これ亦前記の如く、被術者の精神安靜ならざれば、施術に害ある故である。

（三）强烈なる光線を避くるを要す。

凡て强烈なる光線は、何人に依らず、恰も赤色より受ける暗示の如く一種の精神的昂奮を覺へて、安靜を謀り難く從つてこれ又施術を害するからである。

（四）施術者としては第一に心落付き居て精神活潑なる時を要す。

云ふまでも無く催眠術は一個の精神的事業である。故に是非共施術者の位置に在つては充分心の落付きを得て活潑潑地の勢ひを以て被術者に對せねばならぬ、若し不活潑な精神活動で施術に充分の精神力を注ぐ事が出來

得なかつたとすれば、例へ施術し得たるとするも、充分なる結果は到底望み得べからざるものなるが爲めである。

（五）被術者の精神活動の狀態を知る事を要す。

これ亦、施術者の心の作用を知らなければ多くは不成功に了るからである。

尙種々なる狀件を要するのではあるけれどくだ〳〵しく述べる事としたならば、讀者の煩に堪え得ない事を思つて此の邊に筆を止める事とする。

斯樣に施術に際して種々なる重要狀件があるとは云ふものゝ又これに依つて見れば、催眠術なるものは、中々一朝一夕にして、研究や應用の出來得るもので無い樣にもあるが、決してそう〳〵六ケ敷いものでは無い。只若し初學者としたなれば、前にも述べた如く、其精神だけは尠くも心得て置かねばならぬ故に述べる事としたに過ぎ無いのである。此處には亦

暗示の活用法

に關して少しく說く事とする。

暗示は前にも述べた如く、催眠術の殆んど生命とも云ふべきものであつて、此の暗示活用如何に依つて、施術に於ける成不成を來すのは勿論の事、第一に此の暗示に依つて種々なる奇現象を實驗する事をも得れば、又如何樣なる事も出來得るのである故に、此の暗示の活用法こそ、眞に催眠術の生命中の生命ならばである。

暗示の活用法則とも云ふ可きものを擧げると先づ左記の樣なものとなる。

（一）暗示は底音を以てするを要す。

（二）暗示は須く現在的に斷言するを要す。

（三）暗示に際しては、被術者の注意をして暗示せんとする方向に導くの手段に長ずるを要す。

（四）暗示は簡單且つ明瞭にして秩序整然なる言語を以てするを要す。

（五）暗示は眞の誠意より出でたるものたるを要す。

（六）暗示は莊重嚴肅なる言語を以てし、決して反對を許さざるが如き宣言的に發するを要す。

（七）暗示は多くの場合は同一の事を反復するを要す。

尙參考の爲めに此れ等暗示活用運用上の要件に關して少しく說明を加へて見よう。

一の底音云々は、主として三の場合に於ける目的を達せんとするに出づる故である何故かと云ふに、底音を以てすれば、多くの場合他の音響乃至は他の言

語に對して、一種の別なものとなるが故に、何うしても被術者は暗示さるゝ事項に特に注意を注ぐと云ふ好結果を來すからである。尙底音と云ふても、只底い調子の細い聲と云ふ意味では無い、只細い底い聲であつたとすれば、何うしても聞くものをして輕い感じを起させるゆゑ調子は底い乍らも、重味の有る勢力の籠つた言葉を以てせねばならぬのである。

次ぎに二の現在的に斷言と云ふは、多くの場合之れ又然くせねばならぬのである。何故かと云ふに、此れから君の病氣はだん〳〵治るであらう、とか、此の後はだん〳〵痛みも取れるであらう、などゝ云ふ樣に、好い加減の上調子で何うだか解らぬ樣な事を云ふと、更に催眠術治療の効能等を表し得無いからである。これは勿論或種の治療に應用の場合ではあるが、兎に角暗示なるものは多くの場合現在的に斷言すると云ふ事は重んずべき一つの條件なのである。然

し乍ら何處までも必ず、暗示は、斷言と、現在的なる事を要するかと云ふに、決して然うでは無い、或る場合に於ては、全然現在的なるを避けると共に、亦斷言も要せざる事もあるのである、其如何なる場合に然るかの如きに至つては此處に具體的說明を以てするも反つて說き難くして益無きものとなるのであるから、それ等に關しては、其研究家諸君の經驗に依つて收得を第一とされ度いのである。

三の要件の必要であるのは、催眠施術は凡て多くの場合、暗示をして被術者の心裡に强く深い印象を留めると云ふ事が第一であつて、其强く深い印象を與へ樣とするには、勢ひ、被術者の心理活動を散亂せしめず、一點に集注させると云ふ事が必要であり、尙且つ、最初施術に際しては特に然る被術者の心理活動が尤も催眠狀態を作る上に於て、重んずべき事柄であるからである。

四の簡單且つ明瞭云々の如きも、之れ又催眠術の目的を達せんが爲めに必要なるは云ふまでもないのである。くだ〳〵しく長たらしい緊りの無い年寄のくり言の樣な言葉を以て暗示する時は、まだ充分なる催眠狀態とならざる場合でもあつたとすれば、被術者はそれが爲めに笑ひ出す樣な事となつて、遂に失敗を招く樣な事を來すからである。

又、不眞面目な、不熱心な、不親切な、態度も言語を以てしやうが、遂に被術者は四の場合に於けるが如き有樣となつて、これ又勿論の事、目的を達するを得ないのである。誠を積みて感ぜざるものなし、とは古來の格言であるが、眞に然りと云ふべきであつて此の五の條件の如きは、敢て催眠術施術の折許りでは無いのである。

六の條目の如きに至つては說明するまでも無く何人も、必ず然るものたるべ

きを感知せらるゝ事と思ふ。

七も亦之れ三の場合に於けるが如く、強く深い印象を被術者の心裡に與へんが爲めであるが、これも時、所、位に相應して、臨機應變の處置を執るべきである。而して尤も此處に注意すべき事は、同一の事柄を反復すると云ふても、同一語を以て同一事を、同一に暗示すると云ふのでは無い事である。若し全然同一の事を同時に連發したならば、それこそ亦、笑ふべきものとなるのである故同一の事を反復すると云ふものは同一意味の事を言葉を變へてくり返す事なのである。

暗示なるものは前にも述べ來つた如く尤も重要なる事なるを以て、尙引續いて少しく

暗示の有効なる理由

其他に關して說いて見やう。

暗示の効有る理由を說くには、先づ順序として暗示の感應する理由から述べなければならぬ、扨如何にして暗示に感應し、何を以て暗示は如何なる効力を有するのであらう乎。是れ頗る興味ある問題である。

譌らざる師の言に對する生徒の感想は何うであらうか。前者は直ちに信用して

へる樣な友の言葉に接する人の思ひは何うであらうか。前者は直ちに信用して其通りに行ひ、其通りに爲すであらう、後者は云ふまでも無くそれと反對の結果を來すであらう。恰度暗示に感應して暗示通りになると云ふのは、或點に於ける此の事實中の內容と同一理である。多くは何人も長上の者へ對しては其

言に信を置くが自分より凡ての點に於いて目下の者の言であると中々そうはせぬ、此の信を置かるゝのは暗示に感應するのであり、然らざるものが不感應なのである。

然らば暗示なるものは少しも譌る事は出來得ないものであるかと云ふに、或る場合に於ては決して然りとは云はれぬ、數分前までは病氣であつたものに對して『其通り治つてる』の如き疾病治療上に多く發する處の暗示の如きに至つては決して全然譌りで無いとも云はれまい、けれどもこれが精神療法であるからである。精神的に疾病の感念を除却いたなれば物的にも亦只時間上の問題だけで多くは全治するに至るのであるからである。

又然らば暗示なるものは、自己以上の位置（年齢學識其他何事に依らず）に在るものに對しては絶對的に、感應させる事は不可能と云はねばなるまいか、

これも研究家諸君の等しく疑問となる處であらう、處が決して然うでは無い。何故と云へば、普通の事實に徴しても放蕩息子が親を度々圓め込んで遂には自己も親をも非常に困しめる樣な事があるでは無いか、終局の問題は無關係であるがその圓め込むと云ふのは、息子の云ふ處を第一に親人が信ずるからでは無いか、斯うした自己以上の者に對して、自己の想ふ處を以て左右し得ると云ふのは敢て古來から云はれる『親馬鹿子福平』と云ふ一種特別な、妙味な關連を有する親子相互の關係上に於けるそれ許りでは無いのだ。

先づ暗示感應の說明は此の位に止めて置ゐて愈々暗示の効有る所以を述べやう。

然し暗示の感應する理由を述べ來つたからには說明するまでも無く暗示の効力あるべき事は判明した筈とは思ふが、催眠狀態に入る時は、被術者の精神活

動は恰も靜止してゐる水面の樣なものである故に如何なる暗示も明白に且つ深く强て其心裡に印象する、其心裡に印象した事こそ、暗示の効力を示すものであるのだ。治つたと云はれたならばその治つたと云ふ事が深く〳〵心の奥底に浸み込んで强い感念となつて止まるが爲めに覺醒後に於ても、其通りに治つたと云ふ心理活動の度が昂潮つてゐる爲めに疾病の感念は去つて初めて、そこに暗示の効が表はれると云ふものになる。

斯くて催眠術の原理より、其尤も重大要件たる暗示及び豫期作用等を說き進めて來た結果として、一部の研究者に於ては既に〳〵自己も亦催眠術を行ひ得ると云ふ感想すら喚起する者すら有る事と信ずるのである。然し乍ら、多くの諸君は、それとは反對に未だ前說だけにては何等催眠術上の智識も得られ無いと云ふ事とも思はれる。依つて此處には

これ又施術者として重要なる事項

と云ふ題目の下に尠しく說き進めて見よう。

前記の如き二樣の結果は何うして齎らすのであらうか、一は一を聞いて十を悟るの狀態であつて、二は其反對とも云ふ可きであらう、處で何故そうした結果を來たすかと云ふに細心の注意と、只の通讀とに依つてである只注意と云ふ凡俗な一事が、彼の有名なるベルグリンの哲學を生んだ如くに、細心の注意として、特に此の催眠術研究者の尤も注意す可き事項である。敢て催眠術研究者計りてはないが特に催眠術研究家諸君に在つては、尤も重んずべき事柄であると思ふ、如何なる事物も只一片の事實として見る時は、眞に興味も尠なく、且有益なるものたらしむる事は六ケ敷い事共であるが、一朝細心の注意を以て事

物を見聞する時は、如何なる事物の中にも、深い〳〵意味あるものとなつて、吾々に種々なる事を示してゐる事を悟る事が出來る。

『不注意なる人は春の山野にも花を見出さず』

と云ふ諺があるが全く然りと云はざるを得まいと思ふ、讀者諸君は本書に依つて進歩したる催眠術と各種其應用の方法とを研究するに對つては、充分なる深き注意と細心なる研究心とを以てせられて、恰も枯野にも尙美花を發見する人々の樣、著者の說述以上に收得されん事を切に希望するのである。

著者は何時も〳〵斯學の敎授等に際しては必ず、研究者の頭腦をして困しむると云ふ主義を持つて行つてゐるが、一時は眞に不親切の如きものではあるが、反てこれが研究者に取つては、大なる利益となりつゝある事を思ふ。斯くして餘事を說き進めて居れば、讀者は必ずや初めに於ては好意を以て迎へて

は吳れまい、けれども斯くして益々讀者諸君の追求心は昂まり、强く〳〵慾求して後に得たる或物こそ、反て諸君の有益を增進するものとなるのである。自贊の樣ではあるが、著者の前きに催眠術自由自在を著すや、未だ數月を經ざる以讀者諸君よりの禮狀は多數に上つたのである、此の事實に關しては書店の主人の如きも殆んど無類だと云はれて一種の驚きを以て話されたのであつた。著者は未だ年齒も少壯從つて研究の効積の如きも、尙未だ淺薄甚だしきを自覺しつゝあるにも不拘、此の事實に接するを得たと云ふのは此れ云ふまでも無く、他にあらずして、著者の讀者諸君に與へたる一片の警告に依つて、讀者諸君は著者の說述以上に發見し利用し得る處があつたと云ふ事實にあると思ふ、本書の讀者亦、然かくあり度いと思ふのである。

次には、

精神と肉體との關係

に就いて述べて見よう。

精神と肉體との關係は云ふまでも無く、非常なる密接なる關係を持つてゐるそうして何處までが肉體であり、何處までが精神であるかと云ふ事は殆んど判然しない樣なものと成つてゐる。詰り精神と肉體とは何時も〳〵一致並行の狀態にあるからであるが、此れ又吾人の特に注意して研究すべき問題である。肉に感じた事實が精神に表はれ、精神に感じた事柄は、一切又肉に表はれる。即ち此れを身心相關の原理に依ると云ふのであるが、催眠術上の事實は大方此の身心相關上の事實に過ぎないのである。是れに就いては拙著催眠術自由自在に於て實例等を示して說明してある故、尙詳しくは同書に就いて見られん事

を望むのである。

斯樣な次第で精神と肉體との關係は非常なる密接である爲めに、何れが重くして、何れが輕きものであるかも、殆んど判然しないのである。けれども此の催眠術の如き、一つの精神的事業である事の研究應用に携はつて居る人々としては、多くは、精神を重んじて肉を輕視する有樣となつてゐる、或る一派の人人などは次ぎの樣な事さへも主張して居る。

『今まで世界に於て人間不死の靈藥を求めたものは澤山有つた、けれども其多くは只物質上に許り求めた結果、遂にして發見する事が出來ないのであつた依つて吾々は今後精神的に不死の藥を發見致さう、必ず精神的に求めたならば、同時に肉をも保持する事の出來得る人間不死の靈藥も發見する事が出來るに相違ないのである云々。』と。

著者の如きも斯かる主張に對して、只一笑に附すべきものであるとはせぬのである。其理由の如き、敢て此處に説明するの無益なる事を思ふが故に、そは止める事として只少し乍らに、

驚く可き精神力

と云ふ問題の下に異大なる精神作用の幾分を説明する事とする。

漆に感染れ易い人の前に黒砂糖を示して、

『オイ何うぢや、漆を上げやう。』などゝ云ふと、

『キャッ』『イヤダー』などゝ頓狂な聲を出して叫び乍ら逃げ出す樣な事は普通よく見らるゝ事である。著者の如きは幼年の頃鄕里に在りて度々實驗した事があるが、斯樣に漆に對して恐れを抱いて、砂糖を示されてすらそれを見別る

事さへも無く、忽然恐れ叫んで逃げ出す樣な人物であつたなら、其後數時間を出でずして、先づ十人が十人實際の漆に感染れた樣な皮膚に於ける變化を見るこれ云ふまでも無く精神感應の肉に及ぼしたる影響の一例であるが、第一に其精神力の偉大なる事實は驚歎に價する事と思ふ。

何時も全勝を得て、世界何れの國民も、共に其勇武を嘆賞する我が大和魂の如きも、又此の驚く可き精神力の實例である事は云ふまでも無からうと思ふ。大和魂とは別に大和民族の專有する肉體上の或物では無くして、精神上の特殊なるものであるからである。又直接何時も〳〵全勝を整する計りで無く、今次の如きは、我同盟國である彼の英國に於ける議會の席上に於いて、英國首相の言に、日本軍をして一旅團の軍を歐州現時の戰鬪に參加せられたならば、忽ちにして敵軍を敗る事は確然たる事實であると云はれた、とは近く新聞紙上に見

えたのであつた。斯くの如く世界の戰亂にまで大影響を及ぼすに至つた其大和魂には、別に圓い形も無ければ角張つた型もない、只無形の存在たる精神其物であるのだ、實に驚く可き精神力では無いか。

又前きに述べ來つた漆の實例と反面に次ぎの樣な實例もある。

歐州の某心理學者中には偉大なる精神修養の結果として、如何なる黴菌をも自由に飲み下して何等の病狀をも呈さ無いと云ふ人物があると云ふ、是等も亦驚く可き精神力の一例であると云ふ。

而して催眠術も亦其驚く可き力を有する精神、其物に依つて爲し得らるゝ一つの精神的事業であるが故に、勢ひ此の精神力の修養等を要するは云ふまでも無いのである。少なくも催眠術者として大成功を得んなどゝするには當然、此の大なる修養に依らねばならぬことは云ふまでもあるまい。

順序として此處には亦、

施術者實力養成法

を述べることゝする。

同じく催眠術を研究しても或人は百人を百人催眠させ得ると共に、種々なる應用を爲し得るものもあれば、又人に依つては確かに百人に對する三四十人位の外、施術し得無い樣な人もある、と云ふのは何うした譯でかあらう、云ふまでも無く、其實力の相違に依つて生ぜらるゝ結果である。されば施術者とし、又應用者として成功を收めんとすれば、勢ひ實力の養成法と云ふ事は注意すべき事である。扨如何にせば其の實力を養成するに尤も有益であらう乎、初學者の爲めに少しく說いて見よう。

（一）自己催眠應用勢力增進と性格展開。

先づ第一に上げ可き事はこれであらう、他人を催眠させる許りで無く自己自ら自己を催眠して、自己の勢力を增進すると共に、亦自己の性格を固めて、其長所を發揮すると云ふ事は、施術者として實力の養成上重要な事項である。

（二）讀心術の修養に依つて、觀察力を昂めること。

催眠では何うしても被術者である相手の心理作用を觀破すると云ふ事が必要である、それ故、勢ひ讀心術の修養も又自ら要々なことであるが、此の讀心術觀察力と云ふのは文字に現はれてゐる通り、相手の人物を觀破して如何なる人物であるかを識ると云ふ事が第一問題であるのだ。處で讀者諸君は各自「俺は別に長らく人相見をした事も無いし、骨相學者にならうとして研究を重ねた事も無いから、迚もそんな六ケ敷い事は出來ぬ」と或は斯う云はれるかも知れぬが、相手の人物を解釋すると云ふた處で、それ程六ケ敷い面倒なものでも無い。第一に催眠施術に成功しやうとするには只相手の人物は、何う云ふ風に施術すれば、催眠するであらうか、何う云ふ暗示を以て導いたなら尤も早く好く催眠狀態に入れる事が出來るであらうか、斯う云ふ問題を解決する事を得れば好いので、其範圍と云ふものが第一に狹いのであるから、尙々の事容易な事柄がある、それ許りで無く、是等の事は、次第に經驗を積めば、自然に收得する事も出來得るのである、只此處に初學者の爲めに一言して置く必要のあるのは、最初先づ施術せんとするには、それ前に於ける細心の注意と、叶ふだけ自己そのものに對する確信を得て置く樣爲すと云ふのが重んずべき事なのである。細心の

注意と云ふのも前々に述べ來つた如く、第一凡ての事物を無意識的に歡過せず、如何なる事物の中にも深遠なる意味あるもの、と云ふ感念を保持して、何時も〳〵其感念を腦中から去らしめぬ樣、平常心懸けてゐる外、別に差したる面倒な事も何も無いのである。讀心術に關して尙研究せんとする諸君は、拙著催眠術自由自在、第十九章、簡易にして最も有力なる讀心術の前後を精讀せられん事を望む。

尙此の施術者の實力養成法に關しても說く可き事は多い、然し乍ら要するに施術者としては、一々言ふ處を被術者に信仰せられ、確實に催眠の豫期作用を延き起させる事に長ずると云ふのが此の實力養成の主眼であり、且つ催眠施術に尤も成功する方法なのであるから、讀者は常にそれを心懸けてゐて怠る事無く、漸次修養の効を積まれ度いのである。先づ實力の養成に關しては此の位に

止めて次ぎには、

豫期作用の利用法

に付いて述べる事とする。

前說を次第に讀み進めて來ると注意、細心の注意云々と、注意と云ふ事に關して非常に云はれてゐる、そうぢや自分も最初から尙一度注意に注意を加へて讀んで見やう、など丶重ねて精讀された讀者があつたとすれば、或は既に此の豫期作用の利用法等に關しても云ふまでも無く解決された諸君もあるかも知れぬが、然し乍ら、何んな容易い事柄でも、他人に注意されるまでは、中々解らない、そして注意された曉に、初めて『なんだ斯んなことか』と云ふ感を起すと云ふのは、普通の人の多く有る場合である事を思ふと、未だ此の豫期作用利

用法の不明な諸君も定めて多からうと思ふ。依つて尠しく、豫期作用の利用とは如何なるものであるかを說いて見やう。

豫期作用の利用法と云つた處でそう〳〵六ケ敷い事でも無い、淋しいと思へば淋しい、淋しいとも何とも心に豫期せなければ淋しくも何とも無い、痛いと思へば屹度痛い。又自分の病氣は毎日何時なら何時になると留まるなどゝ心に豫期してゐると、全く其時刻になると病狀が留る、斯う云ふ風に心に豫期すると大抵の場合には其通りの結果が現はれる。これが豫期作用である事は前にも述べた通りであるが、そうした心に豫期した事から種々な結果を來すのを利用して、被術者を催眠させる、これが所謂催眠術上の豫期作用利用法なのである、即ち今、自分は此處に催眠術を施されるのだ、處で催眠術を施されると眠くなる、そうだ必ず催眠術を施されると屹度眠くなるに相違ない、斯うした

豫期作用を被術者に充分起させる事さへ出來得たなれば、それで催眠術は譯も無く成功するのである、それには前々諸種の項目の中に述べ來つた如く、施術者として、被術者に對する場合に於ては、自分の云ふ處を被術者が充分信用して、ア、此の施術者に催眠術を施さるれば、必ず眠くなるに相違ない、と云ふ事を思はせる事に勉めたならば、それで良いのである。施術に對つて他に注意を散亂せしめぬ樣、心の落付いた場合を求めるのも、暗示が眞に必ず行はる樣にと、暗示の活用法を勉めるも、强い精神力を養成して被術者をして其勢力の下に置かうとするのも、其他の凡ての事項に至るまで、要するに斯うした豫期作用を起させるに助力となすと云ふ手段や方法、主義方針に過ぎないのである。

尙言葉を換へて此の豫期作用の利用法を說いたならば、第一に自己其ものに於ける、確信を作るのだ、と云ふと或は未だ一回も施術した事の無い讀者諸君

に在つては、一度も嘗て經驗した事の無い事が、何うして出來るか出來無いかそれを確信する事が出來得やう、兎ても少しの經驗も無い者に於ては得て望まれぬ事である、と斯う云ふ讀者もあるかも知れぬが、それでは讀者は、敢て此の書を讀んだとは云はれぬ、たゞ見たに過ぎぬのであらう。何故かと云ふに、手近な例を引いて說明したとすれば、例へば、私はまだ一度も北海道なら北海道へ行つた事は無いから、行かれません、斯う云ふ者へ對して、それでは斯う云ふ風に行き給へ、北海道は日本の東北部に位してゐるのであつて、東京なら東京から行くとすれば、先づ上野から中央奧州線になり、海岸線になり乘り込むのだ、そして仙臺或は福島から又北行の汽車に乘る、そうすれば、岩手縣の方面なり、或は山形、秋田の方面なり通過して、難なく青森縣青森市に行く事が出來る、青森市に着く事が出來たなれば、僅かに數時間船に乘れば直ちに北

海道の地に上陸する事が出來る。君斯う行けば行かれるからそうし給へ。斯う云つて丁寧に道案內をされたなら、先づ大方の人であつたなれば、然らば行かう、必ず自分にも行かれるに相違ない、と斯う確信を起して、旅程に上ると云ふものであらう。これと同じく催眠施術としても、其施術の順序方法の大體を識れば、先づ多くの人々は、凡て一時も早く施術して見たい樣な氣がして、自分は既に充分催眠術の實力を備へた樣な氣がするものである。故にこれが即ち其云ふ所の『確信』なのであるのだ、次ぎにそうして確信が出來たとすれば勢ひ被術者は、それを信仰する事は當然である『いや私はまだそんなものを造つた事はありませんから、何うも出來るか出來無いか一寸解りませんがね』などゝ云ふ職人があつたとすれば、又相手の人は『べらぼうめ職人のくせになんだと、造つた事が無いから出來ないと、ようしそんな野郎に今後何んな事があ

つたつて更に賴むもんか』などゝぶつ〳〵別れて了ふもあらう。詰りこれは一方に確信が無いから云ふまでもなく一方がそれを信じないからである。又それと同時に、信じられないから賴まぬと云ふものになる、此の催眠術に於ては、其賴まないと云ふのが、所謂豫期作用が起ら無いのであつて、賴むと云ふ場合となつたなら、それが亦云ふまでも無く、豫期作用が起つた場合なのである。重ねて云へば、確信が無いから信仰が起らぬ、信仰が無いから豫期作用が起らぬ。と云ふものになり、又確信があるから、そこで、信仰が湧き、信仰が湧いた爲めに豫期作用が起ると云ふものになるのである。

此處に至つて一つの問題が讀者諸君の考への中に浮んだ筈である、何故かと云ふに、然らば催眠術なるものは、何うしても施術に當つては、相手に信仰させて、豫期作用を相手の心に動かせなければ、何うしても成功する事は出來ぬ

もの丶樣に思はれるであらうと思はる丶からである。然し此の豫期作用なるものは、先づ大抵の場合、被術者をして起さしめ得るものであり、又、何うしても豫期作用の起らぬものに對しても、僅かに一二言の暗示に依つて忽然强い豫期の感念を起させる事も出來る。尙それ計りでは無い、此の豫期作用を利用して、施術すると云ふ場合は、多くは普通催眠の場合に過ぎぬのであつて、必ずしも、それ計りを以て催眠施術法の主眼とはせないからである。然らば其方法は如何と云ふに此の項は云ふまでも無く豫期作用の利用法であれば、又項を改め、次第を追ふて說く事とし、こゝには又參考として、

施術法の實例

を述べる事とする。

施術法の實例と云つても、悉くこれを集めたならば到底此の一小冊子の一冊や二冊で盡し切れるものでは無い、又そうした處でそれが一々皆參考として必要が有益であるとも云はれぬ第一に讀者の煩に堪えぬのであるからして此處には只、各種々なる學說を唱へた中で、尤も價値あるものにして、且つ其代表者とも言ふべき、諸大家の實例其他の數種を上げて說く事と致さう。

動物磁氣說の主唱者メスメルの施術法

催眠術と云へば直ちに想ひ出される彼の有名なメスメルは、其施術方法に於ても一派の別を爲してゐたのであつた。其方法はメスメリズムとも云はれて、中々名高い方法である。

此のメスメルの施術法を說くに先だつて此處に一言して置く必要がある。

其他の方法と雖も、亦同一な觀察を以て讀者諸君は讀まれねばならぬのは一二の方法を除くの外は同一であるが、此のメスメルの方法は、流石は動物磁氣說を唱へ出だした人だけあつて、現今の、暗示說である催眠術の施術法に比較する時は、大いに無用の長物たる感を起させる點が尠なくないのであるが、然し乍ら凡てが、暗示說を唱へる人々などの、主張の精神に合致してゐる點の多い事である。

元來施術方法と云ふても其形式に表現れる點は、たゞ催眠の目的を達せんが爲めの手段に過ぎぬのであるけれど、其形式だからと云つて一概には蔑視する事の出來無いものが多いから、讀者諸君は一々それ等の形式を通讀して其中に含まれる處の眞理の發見に勉められ度いのである。

一名撫下法とも呼ばれた氏の方法は、大體次ぎの樣である。施術者たるメス

メル氏は患者に相對して患者の兩手を握る、そして目を見詰めて居る事十分乃至十五分間位し、次いで兩手を患者の頭の上に上げて、それから撫下法を初める、頭の兩側面から胸から腰の邊まで患者に近付いて靜かに撫で下げる、時に又兩眼の上から鳩尾の邊り胸の邊に至るまでに及んで、斯くすること數回に及ぶ、又指頭の僅かに觸れる程度に撫でたり、又手を患者の膝の上に交互に置いたり、又患者の手の拇指を握ることなどもある。斯くすること暫時に亘ると、大抵皆患者は恍惚として來て、靜かに眠りに入つたと云ふ事である。時に又、全身に此の撫下法を及ぼしたり又患者の手足の指の頭きまで及ぼす樣なこともあつたとのことである。

亦氏の方法中、特に有名なのは『バチー』と云つて、患者の身體に手を觸れる事をせず、且つ一時に多數の患者を集めて同時に施術した一種の機械的な方

法であつた。

其方法としては、勢ひ廣い施術室に依つた事は云ふまでも無く、廻りには厚い窓掛を利用して薄暗い中に數多の被術者である患者を入れた、そして中央には樫で造つた一つの桶を置いて、桶の中には亦多數の硝子製の壜を入れた、桶の底には硝子や鐵の粉を散布して、桶の中壜等へは水を入れた。壜は又二列に並べて一列を中央に向け、一列を外方に向けて揃へた、それから其上に初めて蓋をして、蓋の中央には穴を穿ち、其穴からは多數の鐵條を挿して水中から外方へ引き、其鐵條を患者に握らしめて置いた。而して氏自身は隣室に在つて、時に音樂を奏し、或は香をたきなどして、時を見て黄色の異樣な服裝をしたメスメル氏は、其室内から患者の室に入り、手にしたこれも又異樣な鐵棒の先で各患者に一寸觸れなどして靜かに室内を歩るゐてゐたと云ふことである。する

と各患者は、それ〳〵次第に一種の眠りに入り、暫時の後目を醒して見れば、各患者の疾病は治つてゐたとのことである。又氏は此の施術室の周圍には一面に鏡を以て取巻ゐて置く様な方法も用ひつゝあつたとのことである。

メスメル氏の説に依れば、各患者の恍惚として一種の眠りに入り、後醒めて疾病の去ると云ふのは、各人體に有する一種非常に微細なる流動物が、身體から身體に傳はつて其爲め斯うした結果を生ずるのであると云ふのであつた。其爲め、其施術方法としても、前記の如き方法を用ひられたのであつたと云ふ。

次ぎには、

神經病的説の主張者シャコーの施術法

を述べて見やう。

氏は催眠狀態を説明するに、一種の神經病的であると云つて、遂にシャコーなる一派を爲すに至つた位であつた爲めに、又一種特別なる方法に依つて、催眠狀態に患者を導くことをしてゐたのであつた。詰り神經病的である催眠狀態なるものは、神經病が多くの場合に於いて強い刺戟に依つて其病原となすと同様又催眠狀態構成にも勢ひ强烈なる刺戟を以て狀態構成の主とすべきものなることを思つたからであらう。其方法は次ぎの様であるが、多くはヒステリー患者に應用して其効果も相應に收め得つゝあつたと云ふ。

硝子を材料として造つた凝視器を患者の眼前に近付け、それを强く張つた眼で視詰めさせて催眠を促すやう、又は、暗室に患者を入れて置いて、忽然强ひ電燈の光りを患者の面前に輝かせて催眠を謀るとか、又は其燈火を急に消したり、又眼前に强ひマグネシユームの線條を燃して視神經を刺戟するとか、何せ

よ急に強烈な刺戟に依つて患者を催眠狀態に誘導したと云ふのは前にも述べた如くであつた。一名強烈法なる名稱を付せられたるも無論それに依つてである。

然しながら、シャコー氏も又時には言語を以て爲す暗示法に依つて施術することも行ひつゝあつたと云ふ。

次ぎには、

暗示說の代表者ベルンハイムの施術法

を說いて見やう。

ベルンハイム氏は、彼の佛國ナンシーに於いてリエボー氏と共に研究の結果を公表し、催眠術の行はるゝ所以は、一つに暗示の感應にあると云つて、暗示說なる一派を主張し、遂に催眠術學上に一大光明を與へた一人であつた。

されば氏の方法は所謂現今も多く用ひらるゝに至つたのであるが、其方法としては至極簡單で、殆んど何等の形式も形の上には無いことは、言語を以てする暗示法である故に當然のことではあらう。先づ次ぎの樣なものとなつてゐる。

ベルンハイム氏は施術法としては其時の心持ちを以て第一の要件としてゐた其れ故先づ第一に、催眠術と云ふものは、少しも恐ろしいものでも無く、不思議なものでも無い、であるから安心して眠らうとする外、何事も想はずにおいでなさい、などゝ云つて、患者に安心や平靜を起させて以て施術に對する樣にし、次いで愈々施術となると、相對して共に椅子に依るとか、又は橫臥させて置いて、サア私の顏を見詰めなさいと云つて患者に、自分の顏を見詰めさせるそして暫らくすると、ソラ最う睡くなつて來た……眼は閉ぢかゝつて來た……最う眼は開いて居られなくなつて了う、……最う全く眼は潤つて來た……最早

開いて居られない様になつて來る……最う安心して眠れる、……などゝ云ふ風の暗示を與へて、次第に催眠狀態に患者を導くことをしてゐたと云ふ。すると患者は漸次眼を閉ぢて眠りに入つたと云ふことである。尙此の場合それでもまだ患者が眠りに入らぬ様な場合には、最う眼を閉ぢて眠りなさい、安心して眠れるのです、などゝ云ふ暗示と共に、患者の眼を指先で閉ぢさせる様なことをして、其目的を達する方法としてゐたとのことである。

此處には亦、

生理的施術法

と題目の下に參考として少しく說くことゝする。

生理的施術法と云ふのは、云ふまでも無く、生理的に催眠狀態を構成すると

云ふ方法なのである。彼の按摩に身體を採まれて居ると、何時とは知らず眠くなることの多いのや、またお定りの長たらしい說敎に睡氣を催すことなどは、世人の多く知る處であらう。これ等は何であると云ふに、即ちこれ一種の生理的に眠りを催す現象であるのである。詰り聽神經の疲勞とか、感覺神經の疲勞とか云ふことが重なる原因となつて、そこに睡氣を催すと云ふのである此の生理的に眠りを催すと云ふことは、同一な刺戟を長時間連續して與へらるゝと、そこに神經の疲勞を生じ、神經の疲勞は、次いで腦に貧血を助成することゝなるので、初めてそこに睡氣を催すことになるのである、世界各國に於ける多數の催眠術者の間には、隨分此の生理的施術法なるものは多く行はれたのであつた。また現にまだ多く行はれつゝあるとのことであるが、例へば暗示法なるものゝ發見さるゝと共に、價値無きものとなつたとは云へ、或る場合に於いて

は、此の方法もまた大いに有益なことがあるのである。只時間を長く要すると云ふことが、尤も此の方法に於ける不便利な缺點とも云ふ可きであらう。此の方法を行ふとしては、何か光輝ある物體を一定の箇所に裝置して、被術者をしてそれを何時までも視詰めさせるとか、又は横臥させて置いた被術者の體を、一定方法を以て撫でるとかと云ふのが、先づ重なるものとなつてゐるのである尙モルヒヲ、クロヽホルム等の如き一種の魔睡藥を用ひて魔睡的催眠狀態に導くなども、或はこれ生理的催眠の施術法とも云はれることゝ思ふ。

斯くの如く古來の催眠術より說き起して現今の催眠術に及び、其骨子を述べて如何なるものなるかを說明し、次第に其重要事項を說いて其利用活用の手段方法に及び、尙諸種の注意すべき事柄を上げて述べ進めると共に種々なる實例の說明にまで加へ來つたことであるから、既に〳〵讀者諸君は催眠術の重要な

る知識を收得し此處に施術上の確信等も起り、爲めに他のことは何うでも良いから早く〳〵各種々の施術法や、應用法を知り度い、斯ら思はるゝ方も定めて多からうと思ふ、然し乍ら急がば廻れ、又は忙くと物事仕損ずると云ふ諺の如く、凡ての物事は成る可くだけ沈着に行らねばならぬものでもあり、又一面に於ては、成種の人々に於ては、まだ充分に施術上の收得が無いかも知れぬ、などと云はるゝ人々もあらうかと思はれるので、尙此處に、

施術の秘訣

と題目を改め、既に說き來つた事項を總括して抽象的に說明すると共に、併せて其注意事項を加へて述べることゝする。

施術の秘訣と云ふても別なことも無い、即ち前々說中に於いて述べ來つた如

く、各種々なる催眠狀態構成に妨害となる事實をなるべくだけ避けると共に、尤も必要にして且つ便利なる方法を執り、被術者をして其注意を他に散ぜしめぬ樣一點に集注させると共に、適當なる手段、相應なる暗示を以てこれに應じ而して催眠狀態に誘導する、と云ふのが、即ち是れ云ふまでも無く催眠術施術の秘訣その物であるのである。他に何物も存ぜぬと云ふても普通の催眠術施術方法としては敢て過言では無いと思ふ。(此處に云ふ普通催眠とは次ぎに述べる處のたゞ普通と云ふので無く、反抗者催眠から强制催眠一喝催眠遠距離催眠其他に至るまでの一般の催眠施術法を云ふのである。)

尙此處に少しく附記して置く可きことゝしては、催眠術は尤も多くの時所位に依つて其時所位に適する樣、機に臨み、變に應じて、千變萬化如何樣にも、被術者次第で手段方法主義方針を變更して應じると云ふことである。これに關

しては尤も有益なるは、彼の氣合術である、氣合術を學び、それを應用して適當なる主義に出づると云ふことは、尤も此の催眠術施術に於ける必ず成功する方法なのである。充分の成功を收めんとするものは、須く氣合術の研究を積み其應用に依つて、偉大なる催眠術力を發揮し、以て理想的成功を收得せられ度いのである。

氣合術の外其他種々有益なる事項も少なくないのであるが、それ等を一々本書に收めることは到底一小冊子の及ぶ處で無いからして、その種々なる基礎學に至つては、彼の拙著催眠術自由自在、並びに近く著すべき前記書の後篇等に依つて、讀者諸君は充分研究せられ度く此處に一言を加へて置く次第である。

扨愈々これより、

各種催眠施術法

を說き、以て本書の主とする各種々なる應用の方法等に說き進めることゝする。

人々が同じ學問を研究するとしても、各其目的に從つて撰定の學科も異つて來れば、從つて其方法等も別なものとなる、これと同樣に同じ催眠術施術に於いても其目的を異にするに依つて、勢ひ其施術の方法等も異にせざるを得ない或場合には他の人々が催眠術なるものを無視する結果『なんで自分などが催眠術などゝ云ふことにかゝるものか、若し出來得るものなら行つて貰はう、いやかけられるものならばかけ給へ。』などゝ云はれて、自己其者は施術を希望せないまでも、時に止むを得ず其催眠術を無視する人に對して、反抗者催眠法に依つて施術せざるを得ない樣な場合もあらう。また、

學術研究として、被術者に催眠術を施し、諸種の實驗を行ふと云ふ場合もあれば、

病氣治療を目的として、患者に對して施術治療を行ふと云ふ場合もある。

尙同じ病氣治療や惡癖矯正などの目的に於いて施術する場合に在つても、時に其患者の家族ならば切に施術を懇望されつゝも、本人の不承知にこれ亦止むを得ず强制的に施術を行ふ樣な折合も無いとも限らぬ。

兎に角斯樣な次第で、目的が違い、亦は目的は同一であるにも不懸、時に依つて別なる方法を以て施術せざるを得ない場合などもあると云ふ次第で以て、此處に當然各種々なる施術の方法を生ずるのであるが、

先づ此處には順序として、

普通催眠施術法

なら初めて説くことゝする。

普通催眠と云へば何人も直ちに其疾病治療の目的の下に、患者の催眠術を施して、病氣の治療を行ふ時の施術であることを思はるゝであらうが、即ちその病氣治療を目的として行ふ處の催眠術施術法なのである。

で此の病氣治療を目的として行ふ處の普通催眠施術法に於いては、他の場合と異なりそれ相應に室の内外、其他などの關係なども注意せなければならぬ。

何故かと云ふに、例へ何れ程なり相手は病人であり、不快の感想を起させる樣なことなどがあつてはならぬからである。若し不快な感じを起される樣な場合があつたとすると、其爲に治療の目的を果すことが出來得無い計りでなく、

第一に施術に於いて、不成功に終れる樣なことも無いとも限らぬからである。

然らば何う云ふ風に致す可きであらうか。

先づ第一に室内は相當に廣さを必要とする、何故かと云ふに、凡て餘りに狹困しき小さな室であつたとすれば、勢ひ患者は不快な窮屈な感じが起るからである。勿論極々の貧困者許りが、此の催眠術治療を受ける處の患者であつて、常には疊二疊か三疊の小さな室内に三人も五人もの家族で住んでゐる樣な人々でもあつたとすれば、敢てそう〳〵廣い座席を必要とはせぬのであるけれど、如何なる處にも病人はあるのであり、且は現今の處などでは、反て中流以上の人々の方が、此の催眠治療の患者としては多數に上つてゐる樣な次第である故尙々のことである。

次ぎには可成くだけ清潔で無ければならぬ。これ等のことに就いては、云ふ

さでもあるまいが、第一不潔と云ふ事は、尤も多く其室内に入るものをして、不快な感じを起させる故である。

又成る可く種々なる物品を置かぬことが宜敷い。多くの物品を其室内に置く時は、例へ如何に秩序を正して整然として置いたにせよ、必ず被術者たる患者の注意は幾分か其物品に向つて散亂させらるゝからである。尙第一に此の催眠施術としては、椅子とか寢臺とか云ふ樣なものゝ外、別に施術上必要なものは無いのである故、成るべく不必要なものは置かぬことが適當なので別に置く必要は無いからでもある。

強い光線を避けることも又注意すべきことであらう。睡眠の場合に於いて餘りに强烈な光線を室内に投じらるゝと、何うしても幾分かの睡眠に害することのあるのは何人も常に知らるゝことゝ思ふが、此の催眠施術に當つても、亦これ一種の眠りであるが故に、强烈な光輝光線は避けるを以て得果とするのである。若し光線が何うしても室内に投ずる樣な場合などには、窓掛けを利用してそれを避ける方法を構ずるとか、それでも亦止まない時又は、患者に於いて是非共明るい室を望まるゝ樣な場合でもあつたとしたならば、其時は成るべく患者の背後から光線を受けさせる樣爲すのが善良な方法である。

又室内は云ふに及ばず、室外と雖も成るべくだけ靜かなるを求めなければならぬ。騷がしい音響等の催眠に害あることは既に〳〵前說に說き來つたことではあるが、第一に患者の精神をして安心せしむることが出來ず、從つて催眠狀態構成に大なる妨害となるからである。

斯くして種々なる四圍の關係に於ける妨害も無く大底のこと共に於ける適當な準備が出來たならば、次ぎには、

患者の心身上に就いて考察するのであるが先づ生理的に種々なる適否を見るのである。

患者の身體は今何んな狀態にあるか、病氣とすれば必ず幾分かの變化は見るものゝ、餘りに窮屈など起す樣な有樣とはなつて居らぬか何うか、それも無いとすれば、餘りに空腹の感を起す樣な空腹にはなつてをらぬか何うか、又疲勞の程度は如何などゝ先づ狀々なことを一寸調べて見る。

次ぎには又心理的に調査の必要がある、何か特に心配のことはないか何うか無いとすれば、安心してゐるか何うか、又施術に對する心配や疑問は何うか。

尙此の外凡て施術に對する妨げとなるべき事の無いと見留めらるゝまでに、一切のこと共を考察せねばならぬ。

斯くして一切の邪魔物などが無いことを確めたならば、此處に初めて施術に

取りかゝるのであるが、まだ施術の前に於いて、左記の說明を加へて置くのが施術に對する準備の一つとなつてゐるので、斯くしてこそ、初めて施術に於ける一切が完備し、完然たる處無きものと云はるゝであらう。

『されば私が催眠術を施して貴下の病氣を治療して上げますが、まだ一度も催眠術を施されたことのないと云ふお方には、少しくお話して置くことがあります、(勿論これは初回の人に限ることは云ふまでも無い。)

催眠術にかけられますと一切何もかも解らない樣なことの樣に思はるゝお方もありますが、催眠術も此の普通の病氣治療に於いてはそうしたものでは無いのです、勿論一種の眠りには入りますし、又醒めた後は催眠中のことは一切忘れて了ふのが普通多いのでありますけれど、全然何う云ふことをされても知らぬとか知れぬとか云ふ樣なものではありません。

それなら何んな具合かと申しますと、

兎に角一種の好い心地になるのです。そして自分の體が次第々々に輕くなつて、何だか精神も何處かに樂しく遊ぶとでも思ふ樣になるのです。何處もかも全體に好い氣分に充たされて、手を動かしたくもなければ、足を動かし度くもない、益々愉快な心地となつて少しも何うかしたいなどゝ云ふ考へなどは起ら無くなるのであります。」

こう云つて患者の樣子を視る。

此の時、若しも何等かの質問でもあつたならば、尙良く了解の出來る樣、靜かに說いて聞かせなければならぬ。

斯くて愈々何等の施術に害となるべき事柄の無いことを認めることが出來たならば、施術者は特に嚴格な態度をとり、

「ではこれから私が貴方に催眠術を施して心地好く眠らせて上げます。貴方の病氣は此の一回の治療に於いて（とは病症の如何に依りて異る）必ず全治致します。貴方は此の心地良い一回の眠りから再び幸ひの多い、樂しい身體となることが出來ます。サア私の胸を見つめなさい。」

斯う云つて患者に自己の胸の或點を見つめさせ乍ら患者の顏、就中眼をよく見つめてゐる。斯くする時は人に依るものゝ一分間も經たぬ中に、視覺の疲勞があり〳〵と見えて來るが、斯かる患者に對しては、

斯く見つめさせて置き、視覺の疲勞を覺えたと思ふとき（凡そ二三分間の後）。

「もう其通り、かゝつて來た……もう眼は開いて居られなくなつて了ふ……オゝいよ〳〵瞼は重くなつて來た……ソラ其通り眼瞼は着いて了ふ。」

斯う暗示を與へたならば、大抵の場合に於いて、忽ち患者の眼瞼は閉ぢて了

ふものである。

此處に尤も注意すべきは、此時必ず忘れてならぬ一つの暗示がある。

被術者の瞼の閉ぢると同時に、

『ソラ其通りかゝつて了つた。最う何うしても眼を開くことは出來ぬ。』

と云ふ強い斷定的の暗示である。これは被術者たる患者の心中に、『自分は既に催眠術にかゝつた。』と云ふ深い強い感念を起させるためであるのだ。

次いで、

『モウ貴方は其通り催眠術にかゝつた（とはこれ云ふまでもなく反覆の暗示である、詰り催眠したことを深く〳〵思はせる爲めに行ふ處のもので又この反覆の暗示は疾病治療に於いて多く用ふる暗示である）から、これから大變に心地良く眠れます……ソラ其通り睡氣が催して來た。』

と云ふ樣な暗示を與へるのである。

斯くする時は、最早多くの場合に於いて施術者の自由自在となり、其目的を達することが出來るのである。

尙前記の患者をして、施術者の胸の邊りを見つめさせた場合に於いて、中々容易に眼の疲勞が見え無い場合などもあるが、斯かる時には、被術者をして眼を閉ぢさせると共に施術者は指頭を以て、被術者の上額から米噛を通じて胸の邊りまで輕く撫で下げるのが良い。斯くする時は一面心理的に催眠すると共に生理的に、腦の貧血を助成して、多くは容易く催眠狀態に入るものである。

此の外斯かる場合に於ける施術の方法等に至つては數へ盡せぬ程數多いのであり、又著者の如きは、多くの場合前記の方法を用ひず、且一分間以上も費す樣な方法は成るべく避けてゐるのであるが、それ等のことを一々此處に書く時

は、餘りに此の項計りを長からしめて、讀者の煩に堪えないことを思ひ、此處には略することにする。

然し斯かる場合の施術は尤も容易いのであるからして、兎に角被術者をして安心して、催眠の豫期作用を其心理に起させると云ふ此の理を忘るゝことなく事に對つたならば、先づ成功を保證されるのである。

著者の如きは、斯かる場合の施術方法に於いても殆んど一定してゐない、五人の患者に五種の方法を以て施術することなども珍らしくは無いのであるが、讀者諸君は、只前記の理由を解し、機に臨み變に應じて適當なる手段を講ずることさへ怠ることが無かつたなら恐らく失敗を招く樣なことは無いのである。

扨これよりは直ちに、

興味多大なる反抗者催眠施術法

を說き進めて見やう。

反抗者催眠施術法と云へば、云ふまでも無く反抗するものへ對して施術する方法である。即ち催眠術なるものを無視し、或は當の施術者の實力を無視する等の結果は自分は催眠術などにはかゝらない。又は、君の催眠術などにかゝるものか、君の催眠術などに自分がかゝる樣なことがあつたなら、それこそ太陽樣が西から出るのだ、若しかゝるものなら、一つ奮發してかけて見給へ。などゝ云つた風に、非常な勢ひで罵倒などして、反抗の全力を出して施術者に對するなどゝ云ふ場合に於ける施術の方法なのである。

然し斯んな場合に催眠術を相手に施して見た處で仕方も無いが、世の中には

隨分種々な性格の人物があるもので、自己そのものは施術を望なくとも、場合に依つては斯學界の爲め、又は一身上の爲め、斯かる折にも止むを得ず施術せざるを得ない樣なこともあり得るのである。

人は凡て勝敗と云ふことには興味を持つもので、芝居を見ても、惡人が勝つてゐると思はず觀客席から吐鳴り出す樣な人もあり、また角力などでは、大きい角力取が勝ちそうでもあると、小さい體の角力取に、馬鹿に肩を持つて○○負けるな負けるなどの聲が其處此處に起るとか、又勝負の決が定まると、館內がどよめき騷ぐ樣なことのあるには、常々人々の經驗してる處であるが、此の催眠術を以て、自から反抗者を制服して見ると、又其勝つたと云ふことに依つて、多大な興味を味ふことなども出來るもので、これらが所謂屑屋の嬉ぶ屑紙の中の紙幣とか、料理店に於ける客の餘しものとか云つた風な、催眠術施術

者の餘德とでも云つたものではあるまいか、呵々。

思はず横道に筆をすべらせたが愈々これより其本論に說き及ぼすであらう。

普通の被術者であつたならば、何うぞ私に催眠術を施して下さい、吃度貴方の催眠術に依つて私は幸福な日を迎へることが出來るでせう、などゝ云ふ風に一面信仰あり、又懇望を以て施術を乞はれるのである故に、直ちにこれを催眠狀態に導くことの叶ふと云ふのは當然のことであるが、此の反抗者となるとそうでは無い、尠くも施術者の實力を無視すると云ふ豫期作用を生ずべき信仰の反對にあるのである、然らば斯うした被術者は如何なる方法で催眠させるかと云ふに、子供などは好く一時前には喧嘩してゐたそのものが、忽ち今は仲睦じく語り合ふなどゝ云ふ有樣は見らるゝことであるが、それ等と同樣に相手の氣鋒を一轉させることさへ出來れば良いのである。それなら、何か物を與へると

云つた風のことで、其反抗心を無くさせるのであるか、否然うでは無い。相手の反對心は反て益々反抗させて置きながら、其反抗心を挫いて了ふのである。詰り如何に反抗しても迚も駄目だ、叶はぬ、と云ふ感想を起させる。斯くする時は勢ひそこに新たに豫期作用は起つて來る。其豫期作用は普通の場合と異つて反と強い力を有して居るので、行方に依つては面白い、反て普通の場合よりも強く深く、且つ早く催眠させることさへも出來得るのである。

それには、別に六ケ敷いことも無い。たゞ暗示を巧みに行りさへすれば、それで良いのである。然らば其暗示なるものは何う云ふ具合に發するかと云へば先づ最初施術にかゝらぬ中に於いて、第一に間接暗示を以て相手の想像を破れはそれで良い。又其想像を破ると云ふ程度に及ばずとも、はてなそれではかゝるかも知れぬ、などゝ云ふ疑はしい考へを起させることが出來れば、それで先

づ成功である。それには詰り反抗者催眠の實例を語るとか、又は、反抗者は既に催眠狀態構成に必要な精神集注が謀られてゐるから、行方に依つては反て容易いとかと云ふ樣な、何でも相手に前記の心の作用を起させることになるべく時間を費してゐるのだ、此の時間を費してゐると云ふことが、施術者に有つては非常に得策なのである。何故かと云ふと、斯くして居れば、相手は益々昂上して來る、昂上して來れば勢ひそこに精神の虛が生じて來る。其生じて來た虛に乘じてことを行ると云ふ、一種の氣合術的な行方に行るのである。

斯くて愈々被術者たる相手の精神は益々昂奮して來る、其の結果としていよ〳〵施術を迫つて來るが、此の時も施術者は決して急いではならぬ、益々落付いた態度を以て、嚴然と構へるのだ、處で餘り肩を張つたり胸を法外に前に突出すやら、眼を怒らせるなどゝ云ふ風にすると反て失笑など起されるから、其程

度を好い具合に見計らつて、

被術者の前面に位置を取り、

『サアそれでは君の望みに依つて、君の反抗へ對して催眠術を施して眠らせて行る、サア眼を閉ぢろ、催眠術は反抗すれば反抗する程かゝり易いものだ。』

斯う云つて眼を閉ぢさせる。

時に依つては又傍らの人々などに態と、諸君此の人物を今催眠術にかけるから、諸君も大いに妨害して見給へ。などゝ云つて置いて、被術者の狀態に注意する。

此の場合若しも被術者が笑ひ出し相であるなどの時は、

大喝一聲『笑ふと危ない。』

などゝ叫んで相手の氣を挫くのも良い。

斯くして見てゐると、多くの場合に於いて被術者の眼瞼は煽動して來る、此の眼瞼の動は、即ち豫期作用の起つたものと見て良いのであるから、此の機を逸さず或は高く或は低く、或は太く或は細く、なんでも其暗示の言葉に計り被術者の注意の集注する樣な調子で以て、連續的に次ぎの樣な暗示を與へるのである。

『ソラ其通りかゝりかゝつて來た……最う眼は開けなくなつて了ふ……ソラ最うかゝつて了つた……最うすつかり眼は閉ぢたまゝ開けなく成つて了つた……最う少しも何うすることも出來なくなる……全然よくかゝつた……最う何うも仕方がない……。』

斯う暗示を與へたならば、多くは最早や催眠狀態に入つては以前とは打つて變つた呆然した顏付きとなつて、すや〳〵と眠りに入るものである。

然し此の反抗者催眠施術と云ふことは、普通催眠の經驗なども成る可くだけ多く重ねて、種々なる催眠術上の智識等にも實際に就いても研究した曉となつて充分自己の確信も出來た其上で無くては、矢鱈に行はぬ方が良からうと思ふ。

引續いて此處には、瞬間催眠、多衆催眠、無催眠施術から、强制催眠、遠方の人を催眠せしむる施術法、其他に亘つて種々なる催眠術施術法を詳しく說く心算であつたけれど、斯くする時は、餘りに此の催眠術の項を多くして、本書の第一の主眼とする彼の各種應用法の減少等を見ざるを得ないと思はるゝに依り、それ等各種の施術法は、拙著、催眠術自由自在の中に詳說してある故、讀者諸君は同書に依つて詳しく研究せらるゝ樣、これより直ちに各種應用法に說き進めることゝする。

各種應用法

疾病治療に於ける應用法

催眠術の應用は、古來より何事に尤も多く應用されつゝあつたであらうか、現今に於ける應用は何うであらう。斯う云ふ問題に於いて其解決を求めたならば、既に〳〵讀者諸君も了知さるゝことゝ思はれるが、云ふまでも無く古來より尤も多く應用され來つたのは、種々なる疾病の治療に於けるそれであつたと共に、現今に至つても亦然りと云はざるを得無いであらう。勿論解釋の仕方にも依る、講義にこれを解釋したならば、人生各般の事實の悉くは皆等しく催眠術力に依る。斯うも云はるゝであらう。けれども普通の狹い意味の催眠術の應用と云へば、先づ前說の如くであるのだ。處で斯樣な問題を深く此處で究

める必要もあるまい。兎に角一般に催眠術の應用と云へば、直ちに思ひ出されるのは、疾病治療上に於ける應用であるから、先づ第一にそれを說くことにしたのである。

扨然らば疾病治療を目的として催眠術を應用するには、如何にして最善最良の應用となり、如何にして其目的を達すべきかを究めなければならぬ。が此處に其應用の手段方法、主義方針を述ぶるに對つて、一つの重要なる事項がある それは何んであるか、何事に係らず事を成さんとすれば第一に究むべきものはその對象物である。然らば此の場合に於ける第一に究むべき其對象物とは何？曰く、

病氣では何であるか

と云ふことである。病氣とは如何なるものなるかを知らずして病氣の治療をせんとするのは、恰も敵の如何なる敵なるかを知らずして攻擊せんとすると一般到底勝利を得んとして得られざる計りで無く、第一に如何にして攻擊すべきすら不明なのである、されば此處に少しく病氣なるものに就いて述べて見やう。

疾病即ち病氣と云ふ事を文字の上から解釋して見ると、「氣を病む」となる、氣とは何んであるかと云ふと、心氣と云つて以前は精神のことを心と氣と云ふ兩面に解釋してゐた。精神の一面である氣を病むと云ふのであるから恰度、今日のよく云ふ『ソレハ君神經だらう。』と云つたものになる、處で此の言葉は精神と神經とを同一物と觀る誤解から生じた言葉であるから、言葉を變へてこれを云へば、精神作用であらう、又は精神の豫期作用であらう。斯う云ふものになる。兎に角昔から病氣とは氣を病むと云はれたのは云ふまでも無く自分の精

神で病むと云ふ風に解釋されてゐたのであるが、全く然りと云はざるを得無いであらう。勿論彼の身心相關と云つて、肉に感じた凡てのことが精神に表はれ精神に感じた一切の事物が肉體上に影響すると云ふ原理から觀ても、一切の疾病とのものが、皆悉く精神作用から起るとは云はれぬのであるけれど、多くは先づ大抵の場合尠なくも、病氣の最初に於いては第一に精神作用そのものに依つて漸次に病狀を增進すると云ふものである。從つて、精神其物が弱ければ病氣となり易く、又それと反對に、精神が健全であつたなら病氣は起らないと云ふものであらう。此處に於てか精神を左右する一切の精神療法が疾病の治療に効能があり、從つて此の催眠術治療の如きも、そのお仲間入りをしてゐると云ふものなのである。

斯くて病氣なるものゝ大體が了解されたと思ふゆへ愈々各種々なる疾病に對

する療法上に於ける催眠術の應用方法を述べるのであるが、此處には先づ催眠治療として尤も適當であると見認められつゝある。

神經衰弱治療上に於ける應用法

から初めて述べて見やう。

此處に於いて又神經衰弱とは如何なる病氣であるかと云ふことを、成可くだけ詳しく說明する必要があるが、これ等のことを一々詳しく述べたならば、又此の處計りを長らくすると云ふ欠點を生ずる故、此の神經衰弱の原因とか病狀とか云ふことに關しては、至極簡單に述べて、尤も重要なる其療法を叶ふだけ詳しく說明することにする。尙爾後の各種疾病に就いても同樣然かすることを此處に付記して置く。

元來神經衰弱なる病氣の原因は、遺傳性の素質に多いのであるが、他に身體及び精神上等の種々なる過勞とか、睡眠の不足傳染病後の衰弱や、諸種の中毒、情慾にかられて其發動が過度であつたとか、尙激烈なる心身上の刺戟等に依つて起る病氣であつて、多くは壯年期に發するのである。そして其の病狀は千差萬別であつて一々此處に說こくとも出來ぬのであるが、此の病氣の特質とも云ふべきものを擧げると左の樣なものである。

頭が重い、頭痛がする、眩暈がする、耳が鳴る、安眠することが出來ない、物事を忘れ、易くなる、食物が進まない、手足が冷へる、身體中蟻でも走り廻る樣な感じがする、物事に非常に感じ易くなる、從つて一寸した事にも激しく驚いたり、忽ちにして泣き出すかと思へば亦忽ち笑ひ出す樣なこともある。何事にも忽ち倦み易い連續的に何事を繼續することが叶はなくなる。何を見ても

何を聞いても恐ろしい樣に悲しい樣に淋しい樣な不快な感じがする。人に依つては遂に精神が沈鬱し過ぎて自殺する樣な場合までもある。

斯うした種々樣々な病狀を呈するのであるが、それが疾病の如何に依り、又は原因や體質等の關係から、同じ神經衰弱であつても背髓系の神經衰弱となり、又は腦髓性神經衰弱ともなると云ふ次第であつて、前に擧げた種々なる病狀の中表はるゝもあり現はれないのもあると云つた風で到底一々それを說明するの煩に堪え得ないのである。

處で斯かる疾病に對する治療法としての催眠術應用法は如何に行ふ可きであらうか、これからが尤も注意に注意を加へて研究すべき問題である。

患者に接したならば第一番に肉體上に表面はれてゐる病狀の程度を觀るのである。視覺即ち眼などに變化は無いか何うか、血色は何うなつてゐるかなど

丶一々患者の表面に表はれてゐる處の病狀を見て、其程度を出來得る限り識ることに勉めなければならぬ。

次ぎには種々と聞き正して見る、患者の自からこれが原因であらうと思はる丶事柄があつたとすれば、其自覺上の原因から初めて、發病の年月、經過の大體から現症の一切に亘つて成る可くだけ詳しく聞いて見る。そして、前から見た表面に表はれてゐる病狀と併せて考察もして見る。此の時尤も注意すべき事は、何を以て患者は其病原と思つてゐるか、何うしてそうした病氣になつたと思ふのか、また、實際の病狀より輕く思つてゐるか否か、尙自分はこれを治さうと思つても、これ〳〵の妨害があつて治らぬ、など丶思つては居らぬか何うか、若しそう思つてゐるとしたならば、それは何んであるか、何う云ふ風に治療を邪魔してゐるか、など丶云ふ事共である。

斯くてこれ等の一切の事項に於いて、完然する處がないと思想されたならば此處に初めて施術に取りかゝるのである。即ち、普通催眠施術法の項に詳しく說明した如く、四圍の事情考察、身心上の諸關係等に於いて成るべくだけ施術に妨害となるべき凡ての事物を避けて、徐ろに施術を行ふのである。

而して既に催眠狀態に導くことが出來得たならば、次第に深い催眠狀態に誘導いて、最早これで充分暗示の効能は表し得ると思ふ時、いよ〳〵疾病治療の暗示を與へるのである。

此の暗示を與へると云ふことが、又頗る重んず可きものであつて相應に研究を要するのである。前說中に於いて重ね〳〵說き來つた如く、暗示は催眠術の生命であるゆへ、若し暗示の方法が其當を得なかつたならば、到底此の場合に於ても治療の目的を達することは迚も覺束ないのであるから、此處には著者が

多年の經驗等に基いて能ふだけ適當なる暗示の方法を參考として次ぎに說いて見やう。

先づ最初は、前說中の暗示活用法に從ひ、

『君の神經衰弱は全治した。』と云ふ暗示を與へる、次いで患者の訴ふる處の種々なる病狀に基いて、各種病狀に對する治癒の暗示を與へるのである。

例へば、頭重、頭痛、食慾不進、便秘、などの病狀を有する患者であつたならば『君の神經衰弱は全治した故、モウ此の後は全く頭が輕くなつた。……今も其通り輕くなつてゐる。……これからは頭痛もしない、食物も何時も〳〵美味く食べられる。……從つて通じも平常に復した。……などゝ云ふ風に暗示を與へるのである。

尙此の治療に於ける暗示の最初に、『君の神經衰弱は全治した。』と云ふ暗示を

與へると云ふことは、此の病氣としては、殆んど一般に多くの場合に於いて、最初に與へることを得策としてゐるのであるが、一二週間もかゝらねば全治の見込の無いと思はるゝ樣な患者などに對しては、相應に臨機の暗示を以てこれに替へねばならぬことなどもあるのである。又此の暗示は、第一に暗示活用法に說明した如くする外、その患者の敎育の程度、才知の度合などに從つて、相當なる言語を用ふることを怠つてはならぬのである。何故かと云ふに、何がなんだかまだ碌々〳〵解らぬ樣な少年などへ對して、六ケ敷い漢語を使つて暗示しても効能は無く、それと同時に、相當敎育ある人物などに對して、餘りに平易な言葉を用ひたならば、これ又大いに治療の効能に害する計りで無く、時として大なる失敗に墜る樣な場合も無いとも限らぬからである。また呼名などでもそうである。子供や老人などへ對して、『君。』などゝ呼んだなら隨分不相應な場合

も少くないから、これ等も注意すべきことの一つである。

此の神經衰弱症の患者などには、偶々自分の病氣が神經衰弱であるなどゝ氣付かずにゐるものも多いのであるが、斯かる患者には只腦病と思つてゐるものには、腦病と云ふ樣に暗示して、別に神經衰弱であるなどゝ强ひて云ふ必要は無い計りで無く反て其方が好結果を得らることなどもある。

尙暗示に對する感授性の如何に依つて、二三回で全治するものもあれば、中には又二三週日間と云ふ長時日を要する事などもあるのである故、それ等に關しては、暗示の方法に於いても適當な處置を取らねばならぬことは云ふまでもない。

此の外種々注意すべきことなどもあるが一々說明を以て表し惡くい點などもあれば、それ等の事柄は讀者諸君が經驗に依つて自然に自得することが、尤も

特策であると思ひ此處には略することゝする。

次きには、

ヒステリー治療法

上に於ける應用法を述べて見やう。

此のヒステリーと云ふ病氣は、恰度男子の神經衰弱に相比すべき樣の病氣であつて、十五六歲から三十歲まで位の女子を犯す病である。(勿論年齡其他例外は幾許もあるけれど) そして原因も恰度男子の神經衰弱と似寄つたもので、たゞ兩親の遺傳に多く來ることゝ、女子特有の月經姙娠等の異狀其他生殖器の疾患などから來ることが多い位のことを別とする位のことである。從つて其の病狀も種々なる點に於いて殆んど同一であるが、多くは、女性と云ふ一種特別な

性格上の差に依つてそれが多くは激烈に表はれるのが普通である。そして此の病氣も非常に復雜であつて其病狀が殆んど一定してゐないのである。少しく列擧して見ると、些細のことから泣いて見たり、笑つて見たり、憤つて見るかと思ふと非常に面白がつて嬉んで見たりする。多くは眼光が變じて、トロクなり或は鋭くなる身體の彼方此方に一局部づゝ激しい痛みが起つたり、又は半身が利かなくなつて見たり、言語障害と云つて、口が廻らなくなつて言葉が出なくなる樣なことなどもある。又此の病氣も男子の神經衰弱と同じく、或は時としてより以上に激しく、心氣昂進など來して偶々激しい眞の精神錯亂などを來すことなどもある。

扨此のヒステリー治療上に催眠術を應用せんとするには如何にして行ふか、云ふまでも無く、前說せる神經衰弱患者治療に應用の場合と大差ないのである。

先づ施術に際しての注意事項は、普通催眠施術法の項に於いて說けるが如くし、特に成るべくだけ患者の心身を安意ならしめ、決して他に注意の散亂せざる樣、注意して徐ろに施術を用ふるが宜しい。而して出來得べくんば、此のヒステリー患者に對しては、特に施術に際して時間を多く要せざる樣、瞬間催眠施術法、一喝催眠施術法（共に拙著催眠術自由自在中に詳しく說明してある）等に依つて施術し、（一喝催眠施術法は用ふる場合少なし）以て徐々と深さ催眠狀態に導き、機を見て治療の暗示を與へるのである。

で此のヒステリーの治療に用ゆる暗示も多くは一定してゐないのであつて、各個人に依り個性に從つて成る可く適を得たる暗示を施さねばならぬのであるが、前に說ける神經衰弱の場合と異つて多くは、種々なる病狀の一部々々から初めて、次第に抽象的暗示を與へ最後に至つて、『その通り汝のヒステリーは

全治した。』と云ふ風に暗示するのが適當であると思ふ。

尙此のヒステリー治療上計りでなく一般に共通の注意すべき事項であるが、此の治療の暗示を與へる節に、暗示を特に有効ならしむる方法として次ぎの如き一つの注意すべき事柄がある。

何か患者の精神中に於いて、此のことは尤も容易く治るのであらうと思つてゐて、それを施術に語つたとか、又は言葉や擧動の中にそれを表さなくとも、これは吃度一番早く治るに相違ないが、などゝ患者が自信してゐる樣な事が見付つたとすれば、第一にそれを利用してる最初にそれを治療の暗示を與へて、次第に他のそれと緣近いことから緣遠いことへとの治療の暗示を及ぼして行くことである。

此れ等の事に關しては今後折りを見て、成るべく詳しく說明を加へる心算り

ではあるけれど、それよりも、斯かる場合に於いて述べて置いたなら、讀者諸君の記憶にも利する處もあらうかと云ふ一片の老婆心から此處に一寸序を以て說明を加へた次第である。尙此のことはヒステリー治療上の應用法は先づこれに止めて次ぎには、

僂麻質斯治療

に於ける應用法に關して說くことゝする。

同じリウマチスと云つても種々ある。急性關節僂麻質斯、慢性關節僂麻質斯急性筋肉僂麻質斯、慢性筋肉僂麻質斯、畸形性關節炎（一名貧人に多きを以て貧人關節炎と云ふ）と云ふ風に一寸五種類にも別たれてゐる。原因は現今でも人に依つては寒冒である、などゝ云つてゐる今でもある相だが、一種の傳染病

として取扱はれるに至つたのである。そして極少年の子供から初めて約四十才迄位の壯年者が男女共に多く犯される病氣である。で病狀の起る場合は尤も多く、寒冒に犯された場合が多いのであるが、最初は惡寒がして、次ぎには熱が出る。節々が痛んだり、赤く腫れたりする。口が喝いたり、食物が進まなく成つたり（時に又食慾が非常に進むと云ふ例外もある）頭痛もする、耳も鳴ることも多い、で關節病の方では、各手や足の節々が痛む、筋肉の方では、手足の筋肉が神經痛と同じ樣な痛みに痛んだり、又其痛みは今手が痛んでゐたかと思ふと直ぐに足に、移つてる樣な場合など多くある。これが急性であると何れも激しい數日間位ゐで堪まらなくなる樣な場合もある。が慢性となると徐々と病狀が次第々々に昂まつて來る。慢性は多く急性を治療したが全然全治したのでなかつたものを打捨てゝ置いた樣な場合などから多く來るし、又最初か

ら慢性として漸次病狀を呈して來る樣なものもあるのである。

扨此のリウマチスの治療に對つて特に注意すべきは、急性と慢性との云々である、元來此の催眠術治療と云ふことは、既に〳〵重ね〳〵說き來つた如く、精神療法であつて、身心相關の原理に基き、被術者の精神の豫期作用を利用して其目的を達するのである故に、凡て餘りに激しい勢を以て其病狀の發現を來して居るとか、激烈な病狀の增加を示してゐるなどゝ云ふ場合に於いては、或る場合に在つては、如何に全力を注いで治療に勉めても、其病狀の增加などの爲めに、病症を治すると云ふ事が不可能な場合などもある。それと云ふのは云ふまでもなく暗示の力よりも、增進しつゝある病狀に對する精神上の受ける刺激力の强まつてゐる爲めに、斯かる結果を來すと云ふものであるが、斯樣な次第であるからして、此のリウマチス計りでなく、多くの病氣多く

の場合に於いて急性の疾患に對しては、此の催眠術治療は見合すべきことが尠なくないのである。

然し乍ら全然それでは急性病に對しては此の催眠術治療は、思はしくないかと云ふと、必ずしも然うとは云はれぬ。著者の如きも、甚だしい急激な腹痛患者に接して忽然として十數分間の催眠を與へて全治させた場合などもあるが、それは多くは、其病氣の病狀が時折激烈な發作を見るが、平常沈靜な場合に於いて、何うしても治療の目的を達することの出來得ない場合などに於いて止むを得ず行ふと云ふ樣なもので、先づ此の普通の催眠術治療としては斯かる急性の疾患に對しては多くの場合避けるのが得策なのである。勿論著者の如きは隨分と多くの急性患者を治療した經驗などもあるが、その場合に於いては全然其施術方法の如きも、今まで說き來つたそれとは異つてゐるのであつて、若し

同一な方法に依つて、諸君が行ふ樣なことが有つたとすれば、先づ全然の失敗と見做さなければならぬ。依つて此處に特に一つの注意事項として擧げて說明した次第である。(斯かる急性疾患者に對する施術法等に關しては、本書に引續き出版され可き、前の催眠術自由自在の後篇に於いて高尙なる催眠學上の理論等に及ぶまで一切を說くと併せて詳しく說明を加へて置くべきを以て、熱心なる研究家諸君は宜敷く同書に依つて究められんことを付記して置く)。

扨本病の治療に應用して其目的を達せんとするには、如何なる方法に暗示すべきであらうか、尠しく說明を加へて參考と致さう。

此の治療に際しても、前々中說明を加へて置いた通り、普通催眠施術法の應用其他等は又當然行ふべきことは云ふまでもあるまい、先づ第一に、リウマチスは全治したと云ふ暗示を初めとして、「其通り君のリウマチスは全治したから

最早これからは痛みもない。……從つて腫れも次第に引いて了ふ。……食物も充分味も付いて來ておいしく喰べられる。……最う決して今後は熱も出ない……。』と云ふ風に患者の訴へる處の病狀に對して、一々全治とか、再生の憂無しとか云ふ樣な暗示を、言葉を替へつゝ數回反覆して與へるのである。

斯くする時は患者の感應性の如何んに依り、強い感應を見る場合などに於いては、僅かに一回位ゐの施術に於ても、全然其病狀を閉止し得る場合なども少なくないのである。然し乍ら此のリウマチス患者の多くは、大抵一週日間位ゐの施術を要するのであるが故に、其感應性の如何に依つては、暗示に於ける時間期間の長短等も適當に機を觀て應變の處置に出でなければならぬ。尙又一回にして止まつた處の病狀が、再び二回施術の折になると再發してゐる場合なども多いが、斯かる場合に於いては、催眠術は一回よりも二回、二回よりも

三回と漸次かゝり易くなるものであると同樣、一回より二回二回より三回と、回を重ぬるに從つて治療の効驗は深くなり、最初一回にして五時間を保つたものならば、一二回目には八時間乃至十時間も保ち得るものであると云ふ風な、患者へ對する說明を加へて、暗示の効能を表はすことに勉めなければならぬ。

何にせよ此の催眠術治療と云ふことは、精神療法である、被術者の精神作用を利用して其目的を達することを得るものであるから、如何なる時、如何なることたるを問はず、凡て患者の云ふ處、感ずる處等を施術者は能ふだけ利用する方法を講じなければならぬ。それには第一前に於いて說き來つた如く、始終細心の注意を以て凡てのものを意味あるものとして觀、而して其中に含まるゝ處の眞理を捉へると云ふことを心懸くべきである。

引續いて尙種々なる疾病の治療上に於ける應用法も述ぶべきであるが、何れ

の病氣も殆んど大同小異なるを以て、くだ〳〵しき說明は省略して、たゞ此の催眠心理治療に於いて、尤も効能の表し易き大體の病名等を擧げることゝする左に列記して見やう。

神經痛、神經性心悸亢進、神經性消化不良、貧血、膓加答兒、痔疾、胃加答兒、中毒、喘息、夜盲症、半身不隨、月經に關する諸病、淋病、陰萎症、齒痛、脚氣。

尙此の外多數あれども略す。

惡癖矯正に於ける應用法

『無くて七癖あれば四十八癖。』とは昔しから、人間の癖に對する通り相場と云ふ風になつてゐるが、癖と云ふものは中々多いもので、現今の人間はそれ以上

にも上つてゐるであらうと思ふ、歐米諸國からの文明の輸入に伴ふ新しい舶來の癖も亦、大いにそれに預つて力あることゝ思はれる。

然し數などは何うでも闘はぬが、癖と云ふものは多くは良いものではない、從つて以前から此の癖は成るべく治すべきものとなり、また、治るものとされてゐた結果、或は藥物に依り、又は禁厭などに依つて種々と此の癖を治すと云ふことが行はれてゐたことは云ふまでもあるまい。が癖の性質として、何うも藥物は眞に効能が無い、では禁厭は何うかと云ふに、これも餘り望みがない『なんだマヂナヒだ、そんなものが何うするものか。』などゝ云つて、多くの人々が禁厭に對して信用を置かない樣になつた現今に於ては、癖に對する禁厭の効力は次第々々に尠なく成つて行くと外思はれないからである。

處で世の中は良くしにもので、此に新しい癖の矯正法が發見された。それ

は外でもない、所謂此の催眠術應用の矯正法なのである。

扨何うして癖に對する藥物の効力が少なく又禁厭等の治す力が禁厭の信用力が尠なくなつた位いのことで其望みが思はしくなくなつたかと云ふに、癖は元來殆んど精神的作用に依つて起る處のものであるが爲めである。病も氣からと云ふが、此の癖は病以上に精神作用が其大體を成してゐるからであつて、從つて此の催眠術矯正の効力あることも認めらるゝことであらう。然らば癖の矯正法としての催眠術の應用は如何にして行ひ、又如何なる程度に如何なる種類の癖に對して其効力があるのであらうか、先づ次ぎに癖の中に於いて、催眠術で治るべき種類のものを列擧して示さう。

寢言を云ふ癖、朝寢をする癖、坐睡の癖、吃る癖、顏を赤くする癖、手淫を行ふ癖、婦人特有の月經に關する癖、酒煙草などの癖、寢小便の癖、床に坐

いても早く眠れぬ癖、間食の癖。

前にも述べ來つた通り、癖と云つても中々數の多いもので、到底此處にそれを一々說く譯にも行かぬが、尙此の外にも催眠術應用に依つて矯正は適當な癖の種類も餘程多數に上つてゐるのであつて、中には書くに書けない、云ふに云へない種々な癖までもある。で癖と云つても一概に皆惡いものとは云へない、中には其人自身の爲め、又は其人の周圍の人々にまでも、善良な結果を來すと云ふ善い癖もあるが、然し大體に於いて癖と云へば惡いものが多いのであつて其爲め其人は社會から遠ざけられて立身出世を妨げる樣なことも少なくないのである。されば催眠術研究家の讀者諸君は、此の術の應用に依つて、成るべく多くの癖の爲めに苦しむ人々を救ひ以て世の爲めにも勉められたいのである。

扨これから愈々其應用の方法を說くことゝするのであるが、此處には先づ著

者の經驗に尤も多數を占めてゐる。

遺尿癖の矯正

に應用の場合を述べて見やう。

先づ其本人なり、又は親人などに伴れられた者なりに接したとする。此の場合何人に依らず、遺尿症（即ちね小便）などの者であつたとすると、大抵は其の遺尿症のことを種々と他人から問はれたり、また話されたりすることは、不快な感じを起すものであるからして、成るべくそのことに就いては直接種々と云はない方が宜敷い、然し乍ら、その遺尿症が生來からであるか、又は近い發作であるかとか、夜るであるか晝であるか、其時の本人は何んな氣分になるかなどゝ云ふ種々なことや、尙その原因を調べる爲めに必要である處の日常の生

活狀態とか、他に病氣などないか、家庭に於ける本人の境遇とかと云ふ樣な種類のことだけは何うしても聞き直さねばならぬのであるから、それ等のことを尋ねるとしたならば、一々それから何うだ、これは何うだなどゝ云つて尋ねず、成るべく遠まわりをして、種々な浮世話などの間に、それとも知らず本人が語る樣に聞ひ正すのが良い。又或る場合には是非共さうせねばならぬのである。若し他の疾病の患者とか、參觀人でもある樣な場合などであつたとすると何うしても他室に於いて此の症狀調査は行はなければならぬ場合などもあるのである。

で此の惡癖の矯正に於いても、彼の疾病治療に於ける大體の疾病の病理の必要なる如く、癖なるものゝ大體の性質を知るの必要があるからその、矯正法を述べるに先だつて少しくそれに關して說いて見よう。

此の遺尿癖と云ふのは、癖とは云ふものゝ殆んど一種の病氣とも云はるゝ樣なものであつて、腦細胞の變換が病氣に依つて構成されたとか、甚だしい不衛生的生活（即ち液體物を多く過度に用ひるとか非常に寒いのもかまはず寢具などは充分でないとか云ふ樣な）とか乃至は、精神上の甚だしい壓迫、詰り親達が眞の親人で無いために激しい無理をされるとか云ふ風な、所謂主として精神的の激しい苦しみと云ふた風のこと、尙同時に不良教育と云ふことや、其他種々なる病氣などから起る處のものであつて、本人は、知らず〳〵床の中に在つて小便を漏らして了ふのである。そして多くは寢てから一二時間内に多くして又夜明に漏らすとか云ふ風で大抵は小便をなす夢など觀乍ら斯うして了ふのである。そしてそれが平常の場合に於いて、他の人から發見されて種々と云はれるために、益々其度が強くなると云ふ有樣なのである。それ故一寸は精神作用

ではなく、一種の純粹な病氣の樣であるけれども、大いに然らずして先づ大體に於いて精神作用に原因するのであつて、眞の癖であるのである。

で施術に際しての注意と云つては、たゞ前々から述べ來つた處の普通催眠施術法に依つて何れも行ふのであるが、その暗示の如きに至つては至極造作もなくたゞ次ぎの樣なことを反覆して暗示すればそれで良いのである。

『オ、其通りお前の遺尿は治つた……最早決して今の後は知らないで小便の漏ると云ふことはない。……其通り治つてゐるからもう此の後は小便が溜ると必ず眼が醒める。……モウ斷じて再び知らないで小便のもると云ふことはない。……如何なることがあつても更に知らないと小便が出ることは必ずない……其の通りお前の遺尿症は全く好く治つた……。』

と斯う云ふ具合に暗示を與へるのであるが、それで面白い程効能がある。先づ

著者が多數の經驗で見ると、十人の中九人以上までも、只の一回の矯正で忽ち遺尿は閉止して了ふ。たゞ、前後策として其後二回位いの矯正を重ねて再發の必ず無い樣にして置くことが必要である。又中には偶々數拾人の中に於いて一人位ゐは、尚其後も一週日間に一度位い宛三四回も施術矯正を要する樣な激しいものもあるのであるが、それ等に付いては此處に詳しく說明を加へるよりも讀者諸君に於いて經驗を重ねた結果發見すると云ふ風にしたことが得策であらうと思はれる故、此處には省略する。次ぎには、

喫煙癖矯正

の場合に於ける應用法を述べることゝする。

此の煙草を飲むと云ふ癖は、何人も知らるゝ通り、他人の煙草を飲むのを見

樣見眞似で、子供の時から好きであつた結果とか、或は好奇心から青年時代などから飲み初めて、それが習慣となつたとか、又は商賣上人と接した場合などに何うも何も無いと云ふと何となくその場合がまずいから飲み初めて次第に習慣となつたが、扨止め樣とすれば中々止まらないとか云ふ樣なものであるがこれも此の催眠術の應用で矯正する時は、至つて譯もないものである。

で暗示としては次ぎの樣な言葉を以てすることが尤も適當であると思ふ。

「君は其通り煙草が嫌ひになつた。……モウ決して君は煙草を飲むと云ふことはなくなつた。……君は煙草を飲まなくなつたのではない、モウ何うしても飲むことは出來ないのである。……其通り煙草を飲み度いと云ふ感じは起らなくなつた計りでなく、全然君には煙草は大嫌ひなものとなつてゐる。……此の後煙草を飲まうなどゝすると非常に不快な感じが起つて來る。……モウ

決して君には煙草は絶對に飲めなくなつて了つた……。』

と斯う云ふ風に暗示を與へるのである。

處で此處に一つの注意して置くべきことがある、それは次ぎの事實である。

今までの暗示に用ふる處の言葉としては、何れも皆斷言であつた。現在的の斷定に過ぎないので暗示法上の言葉に示した例であつた。が、此處にはそうでなく新らしい暗示の言葉を示してあるのであるが、斯かる大體が習慣から來つたところの癖そのものに對しては、殆んど一般に通じて、そうした言葉を必要とする樣なものであるが、此の煙草を飲む癖や、又は酒を飲む癖などの矯正に於いては、

斷定、現在的の斷言の外に、尙必要な事柄があり、詰り、前記の暗示の例に示した如く、モウ決して飲むことは出來ない。と云ふ計りでなく尙一歩進

んで、「飲まうとすれば非常な不快な感じが起つて來る。」とか、或は、飲まうとすると嘔吐を催して來る。と云ふまでに強い一種の逆な暗示を必要とすることである。

尙又斯かる矯正に於いては、覺醒させると共に、直ちに其對象物を與へて試みさせると云ふ方法を執るのが暗示の効力を顯す上に於いて尤も有効である。詰り斯くする時は、強く深く與へられた暗示の印象がそのまゝ全然強く連續してゐる爲めに、確實にそこに暗示の効力を認めることが出來ると同時に、尙それを繼續させると云ふ上に於て得策であるからである。

此の喫煙癖の矯正に就いては、著者の經驗中に面白い一つの笑ひ話しがあるから次ぎに述べて見やう。

山梨縣は北巨摩郡江草と云ふ山村に滯在して多數の患者を毎日治療してゐた

其折のことであつた。或る日の朝、食前運動として散策がてら、雄大なる自然の山水に曠大される様な一種の妙味を味ひ乍ら、谷川に添ふて下ること數丁にして買物すべく一商店を訪ねた。するとそこに數日前氣管が病めるからと云ふので、頼まれて一回の喫煙禁止の施術を與へた興水某と云ふ青年が居合せたので、著者は此の青年に其後來らなかつたことに不審を抱ねてゐたので直ちに次ぎの様に質問した。

『君は其後來られなかつたが一體何うしたのですね……。』

すると某は次ぎの様に答へた。

『へゝ申上げなくつて申譯もありませんでしたが、……實は止めて貰はうと思ひまして……。』

依つて著者が、再び次ぎの様に問ふと其答へが頗る面白い。

『何うしてゞすな、止め様と思ふと云ふのは。』

『エゝ實は……。』と暫時言葉を澁らせてゐたが、又續いて『實は私は商人ですからね……。』

又躊躇してゐる、著者は默つて見てゐると、

『實は其商人ですからね……他所へ行つて疊の毛羽許りをむしつてゐるのも何うかと思ひまして、……それに何にせよ煙草は商人の一つの道具でして、時に煙草を飲んで話し込んでゐた爲めに、案外な商業が出來る様な場合などもないとも限らぬと、よく人々が云はれますが、成る程考へて見るとそうでもある様ですし、……まだその外にも、此の間一回先生に矯正ていたゞいてから、何うも何んとなく煙草の味が變つて來た様で、あれからと云ふものは、錄に飲まずにゐますから、これなら氣管の方にも害にもなるまいかとも思は

れますので、恰度此の位い少し宛飲んでゐるならば、商人としては尤も適當だらうと思ひますから、何うか先生彼れなりでお許しなすつて下さい。』

と、先づ答へは斯うであつた。

此の喜劇的な青年の言葉を耳にして著者は、その青年以上に、年の若い著者だけに堪え兼ねて思はず大聲に笑ひ出した。と續ひて商店の人々も共笑する、果ては青年某自からさへも堪らなくなつたか、大口開いて笑ひ出したと云ふ次第、眞に一場の喜劇であつた。(此の青年は爲めにそれなり止めて了つた)。

斯樣な次第で大抵の場合に於いて、此の矯正も一回位いでも相當に効力を認めらるゝのであるから、其後三四回も施術して善後策を講じたなれば、全然大の煙草嫌ひとなるのである。

此處に尙一つ注意ずべきことがある。それは、斯かる煙草とか酒などゝ云ふ

ものは、多くは習慣に依つて次第に其飲用の度を增して行くものであるが故に全然中止すると云ふ被術者でなかつたなれば、到底矯正の効は長時日に有り得べからざることである。されば此の矯正を行ふに對つては、止めると云つても全然止めるのでなく、日に五十本宛飲む煙草を、毎日十本位いにとか、毎日一升宛飲用する酒を、日々一合位い宛にして貰ひたいなどゝ云ふ被術者へは、長日月間其効力の持續するものでないことを話つて、其上被術者に承知させた曉でなくては施術矯正すべきものでない。尙成る可くんば、絕對的禁止の者ならでは、施術矯正を行はないと云ふのが、施術者の立場としては、全體から云ふ時は、得策なのである。

まだ此の事許りではない、斯かる一種の或物を用ひて居ると云ふ人々は、多くはそれを全然中止したならば、必ず幾分かの生理的變徵を來して害があるの

ではあるまいか、と云ふ疑念を大抵は持つてゐるものであるから、必ずそうした疑念の晴れる樣、親切に說明を加へて被術者に安心させると云ふことを謀らねばならぬのである。されば施術前に於いて說明して安心を與へると共に、又施術中も暗示中に加へて充分斯かる誤解を解く樣勉めなければならぬ。次ぎの實話は斯かる場合施術前に被術者に說き聞かせる一實例として大に有益であるから此處に附記して置く。

事は未だ著者が鄕里秩父山中に在つた少年當時のこと。去る明治三十七年二月五日帝國政府よりは露國に向つて外交斷絕の通牒を發し此處に全く日露の國交は破れて北淸の野に兩軍互ひに干戈を交へ、慘澹たる戰鬪の一大活劇が演出さるゝに至つて以來、昨日は何處、今日は何處の何聯隊と次第に各軍人は鄕國を辭して出征の途に上る、幾旬ならずして、海軍に陸軍に愈々激しき大戰鬪は

行はるゝに及んでは、敗北する敵軍は云ふに及ばず、連戰連勝の皇軍に於いても陸續として戰死の公報なども發表さるゝことゝなり、小學生徒などは學校への往復に女子も男子も口々に、

『此處は御國の何百里、離れて遠き滿州の、赤い夕陽に輝らされて、友は野末の草の陰、噫戰ひの最中に……。』

などゝ征露の軍歌を唱へて谷間の小さやかな山村にも一種悲哀な空氣を漂はせる、寄るとさはると、戰爭は何うだらう、イヤ勝つた勝つたまた勝つた。然し日本でも餘程今度は戰死者などもあるさうだ。それに就けても○○さんの息子さんなどは何うだかね、無事でゐて呉れれば良いが、……などゝ話し會ふ。斯う云ふ場合となつて我鄕山の人々は、常々ですら熱烈なる神佛信仰心のあることゝして、出征軍人の家族は申すに及ばず、一般の老幼男女の別もなく、旦に

神前に平伏して皇軍の勝利を祈願し、夕に佛に對つて皇軍の無事大勝を祈ると云ふ有様となつた。此の時、著者の血族者の中などにも數人の出征者などもあつたが、其中に田中某と云ふのがあつた。其出征軍人田中某の父は少年の當時からとか云つて非常なる例外の煙草好きで、『十日や二十日は飯などは喰はなくとも良いが、煙草だけは迚も一時間も止めては居られぬ。』と斯う云つて毎日鋤鍬を手にして山や畑に働らくにも、始終煙草を口にしてゐると云ふ特別な人物であつた。

其田中某が我が子の無事に戰功を顯す様と神に祈願の誓ひとして、或る日から其大々好物の煙草で毎日、刻みでも十匁も飲むと云ふそれを斷然止めて了つたのであつた。斯くてこそ神願の成就もあつたらうか、某は出征中、數回の決死隊等に加はつて、死を眼前に扣へた危險を犯して皇國の爲めに活躍したが、

何の恙もなく多大な戰功を顯して無事凱旋の榮を得られたのであつた。

處で其父なる某は現在でも鄕里に在つて働いてゐるが、そうした大好きの煙草を止めた後少しも何等の自體的惡影響も受けることもなく全く無事で過ごしたのであつた。

尤も斯うした場合であつたなら、何人も等しく、我子の無難皇軍の全勝を祈るてふ信念計りが强烈であつて、他事を顧みないのであるから、或は『止めたら害があるだらう』などゝ云ふ感念は毛頭無く、其爲めそうした結果を表すに至ると云ふものになるかも知れぬが、兎に角此の事實に徵して見ても、『害があらう』『害があるに相違ない』『必ず害がある』などゝ云ふ感念さへ無かつたならば、決して何れ程の多量の煙草飲む習慣に依つてニコチン中毒に犯されてゐるが如き人々であつたにせよ、何等憂ふることはないのであると思ふ。であるか

ら讀者諸君は斯かゝ場合に臨んでは、充分親切なる說話を以て、被術者に全く安心を與へると共に、また施術中を利用して同じく何等憂ふるに足らざる計り か必ず心配ないと云ふことを暗示して其目的を完全に達することに勉むべきである。

此の煙草を飲む癖の矯正法は、同時に又酒飲み癖の矯正法として應用されべきものである、と云ふのは、煙草と酒との兩癖は種々なる事項に於いて共通點が多いから從つて煙草を飲む癖の矯正法は、また酒を飲む癖に對する矯正の應用法として、殆んど同一に見做して宜いからである。

次ぎには變つた、

吃語の矯正

に應用の場合を述べて見やう。

吃語とは一體何う云ふ性質のものであらう乎、先づ第一に順序としてこのことから說くことゝする。

吃語とは言葉が咽喉に支へて了ふと云ふ樣な具合で、自分の言はうとすることが言葉に出ない、亦言葉を出すに中々骨が折れる、と云つてそんな弱い骨がある譯では無いが、マア云ひ替へれば樂に言葉が口から聲となつて出ないのである。吾々が外國語を知らずして、外國人に接すると何うしても思ふことを相手に人の心に傳へることが出來ず、爲めに一種異樣な不充實や不快な感じがするが、チヤンとお互ひに言葉が通じるのでありながら、自分の精神にあることを相手の人に傳へることの出來ないと云ふことは、前の場合に比べて層幾層の不充實や不快やを感ずることであらう。これを思ふと實際思ふ樣に口のきけな

い物の云へない吃語人こそは、實際同情に堪えないのである。で此の吃ると云ふのは、多少生理的な關係もあるものゝ、その多くは主として精神作用から、そうした結果を生ずるのである。それが爲め、其吃語る人の樣子を見て居ると誰も目の前に居らず一人で居る時で、何か其人の特意な歌でも歌つてゐるとか或は一人言でも云つてゐるのを聞くと、何のこともない、普通に容易に連續的なきれいな言葉で喋つてゐるのを見る。處がそうでなく、他の人と相對して話す場合となると、又忽ちどもる、就中目上の人と顏を合せて何か云ひ合つてゐる時などは特に激しく吃語る。また他の人から吃語る眞似をされると、益々激しく吃語つて了ひには何も言葉に出せない樣になるのを見る。

此の事實は何事をか語つてゐるであらう。即ち吃語原因の主として精神作用にあることを示してゐるではないか。何故かと云ふに、一人でゐて何か歌でも

歌つてゐる場合であつたなら、更に自分は吃語るのであると云ふ感念の發動が無い爲めに吃語らぬのであると共に、又他人と相對して何事か談じてゐる時には、再び『自分は吃語りである』と云ふことを其精神中に呼び起し、從つて『自分は吃語る』と云ふ事を心に思ふからである。即ち、前に精神の豫期作用中に引例して說明した如く、『自分は吃る』と云ふことを其精神に豫期するが爲めに斯くは吃語るのである。また慾求は決して豫期と同樣な結果を來すものでなく反て其れと反對な結果を生ずるものであるが故に、他人に自己の吃語る眞似でもされると、如何に吃語まい〳〵と慾求しても、反て吃語りは激しくなるのである。

されば斯う云ふ癖を矯正するには、たとその吃語る、『自分は吃語る』と云ふ豫期作用の起らぬことを謀ると共に、尙反對に、『自分は決して今度は吃語らぬ』

と云ふ強い感念を起させることさへ叶つたならば、此處に於いて全く完全に吃語りを治することは其目的を達せられるのである。尚重ねて云ふたなら、吃語りの人に、其自分は吃詰りであると云ふ考へを打消さして、『最早更に自分は吃語らぬ』と云ふ強い確信を起させることさへ叶つたなら、全然吃語は矯正されて了ふのである。

扨然らば其の方法は何うであらうか、參考の爲めに少しく說いて見やう。

施術法其他充分なる催眠狀態に誘導くまでは前々說の通りであるから、此處にくだ〳〵しく說明するまでもないが、其暗示となると、次ぎの樣なものである。

充分な催眠狀態となつた時を見計らつて、

「オヽ其通り君の吃語りは全治つた……全く君の吃語りはすつかり治つて了つた。……最う決して此の後は吃語ることはない。……其の通り好く全く治つてゐる。……これからは何時、如何なる人の面前に何う云ふことを云はうとしても充分に云はれる、……何んな六ケ敷いことを、何處で何時言はうとしても、必ず自分の思ふ通りに云はれる。……全然り吃語は治つたからである……。」

斯う云ふ風に、多くは同一意味のことを種々と言葉を變へて、詰り變化に富んだ同一意味の『吃らぬ』『吃らぬから何うだ！』と云ふことを反覆して暗示を與へるのである。

尙此の吃語の矯正に應用の場合に於いては、斯く種々と吃語らぬと云ふ感念を起させて、それを強く精神中に印象させる方法をとる計りでなく、其補助として頗る効あるものであるから、次ぎの樣な手段を以て其目的を達することに

勉めるのが得策である。

其者が平常吃語る場合に於いて尤も多く發音に困難を感ずる音を擧げて、それを催眠中に於いて練習させると云ふ方法である。例へばカ行ならカ行の音が尤も其者の發音に苦しむ音であつたとすれば、催眠狀態中『君は私の云ふ通りになら何事もすることが出來る……。今君は其通り眠つてゐるけれど、私が口をきかせ樣としたならば、君は自由に口を利くことが出來るのである。……サア是れから私が君に物を云はせる。……君は自由に私の命令通りに物を云ふことが出來るからお云ひなさい……。』斯う暗示して置いて、次ぎにカ行の發音をさせる。『カ、キ、ク、ケ、コ』カ、キ、ク、ケ、コ、と云ふ風に被術者に明白に解る樣に、施術者が先きにたつて發音して被術者にまた其通りに眞似させる。

斯くして催眠中に練習させると共に、既に今後は吃語らぬと云ふ感念を強む

ることさへ謀つたならば容易に其目的を達することが出來得るのである。

此處に一言して置くことは、此の吃語る人も亦他の種々なる疾病や諸習癖などゝ同樣、直ちに一回や二回で全治する者計りでなく寧ろ反て多くは多數の施術回數を要するものであるが故に、被術者の暗示感應性の如何んを見て、これ又相應なる暗示を以てこれに對する可き事である。

此の外種々なる惡癖の矯正に於ける應用の方法も一々擧げ來つて詳しく說明したいのは山々であるが、何れも其多くは大同小異であつて、初學者と雖も熱心と注意とを怠ることなく、凡ての事物には何等かの意味あると云ふことを始終自己の精神中に藏して、何事に依らず、其の事、物、の中から其事物に含まれてゐる眞理を發見しやう、と云ふ考へで次第に修養を積み、研究を重ねたな

らば、或は此處に著者が僅かなる説明を加へるより以上にも、熟達するであらう（と熱心なる讀者諸君のことなれば）と思はるゝ外、又此の小冊子の到底望んで得べからざることである故、此の惡癖の矯正に對する應用の方法はこれに止めて、次きには次第に興味多く且つ痛快極まりなき種々なる應用の方法を説くことゝする。

神秘、不可思議、奇々、妙々なる事物現象の解決に於ける應用法

『何うも君不思議だなア！』と云ふ者があつたなら『ナゼ？』と忽ち前の言葉を耳にした者は反問する。強く反問する。若し反問しない人があつたとすればそれは既に其事に就いて一切を知つてゐると誤解した人か、乃至は馬鹿か仙人

かに相違ない。

何故かと云ふに、たゞ『何うも君不思議だなア。』と云つた許りでは、何が何うして不思議であるんだ何んな人でも解る筈がない。又斯う云ふ人智に對する強い慾求心を起させる、また人情の弱點によく突入する言葉を聞いて、何とも思はぬ樣な人があつたとすれば、それこそ只の人でない、それ故馬鹿か乃至は仙人乎とも云はれるのである。

處で此の事實は前にも云ふた通り、一面は人間の知識慾に向つて頭をもたげさせ、又一面には人情として不思議の事實と聞いたならそれを見聞したいと云ふ、所謂知識慾と普通の人情とに依つて、斯くは反問を起させると云ふのであるが、眞に人間と云ふ者は、神秘的事物とか、奇妙、或は不思議とか云ふ樣な物事に對しては其の物事の内容を知らうと云ふ、強い〳〵慾求を持てゐるもの

であつて、それが爲め緣日などへ行つて見ても、何でもない一寸した事などでも、さも大した不思議なものだとか、奇妙奇手烈なものゝ樣に客呼びなど言つてゐると忽ち澤山の人々は其處に群り來つて、汗を流して働いて取つた貴いお錢を惜し氣もなく投げ出して、どし〳〵其不思議奇妙なものを見樣として這入り込むのを見る、が若し此の不可思議とか、奇妙とか云ふ樣なことを、催眠術を應用して解決したならば、一寸やそつとの形の異つたものだとか、或は近い處には見られない遠方から持つて來たものとか、乃至は今はない昔のものだとか云ふ樣なものなどを、僅かに識る位のことが出來る許りの詰らぬものと違つて、世界にどころか或は宇宙間の一切の不思議な現象を、人間の最初又はそれ前から初めて、遠い〳〵未來のことまでも、凡ての事物が解ると云つても多少は過ぎるかは知れぬものゝ殆んど過ぎた言葉ではないであらうと思ふ。

斯んなことを述べたなら讀者諸君の中には、或は餘りと云へば大虛言を書くと云ふ感じを起さるゝお方も有るであらうが、然し乍ら、次第に本項を讀み進めると共に、「アゝこれなればアゝ書くのも無理はない、とか、又は、餘りエライ事を云ふから大枚を拂つて這入つて見たが、何だ馬鹿らしいものであつたと云ふ樣な感じも起らないとか、乃至は、最初に書いて有つた程ではないが、成る程實に有益なことが書いてある、と云ふ位いな感じは起されることゝ思ふ。處で、前提許りを餘りに長くする時は、それこそ緣日の見世物と同一視される嫌があつてはならぬ故、これより愈々本文に進んで各種々なる奇妙不思議の事物や現象の解決に於ける應用の方法を述べて見やう。

神佛の靈顯ある理由

神佛の靈驗ある理由を解決するなどと云ふたなら、人に依つては『イヤソンナ事は聞かずとも讀まずとも解つてゐる』と斯う云ふ方もあるかも知れぬ、が然し乍ら其人は實際それを知つてゐるかと云ふに、眞にそれを知る人は眞に尠くないことゝ思ふ。全然識つた人がないとは云はれぬ、現に著者の如き少壯のものに於てすら、此處にそれを述べ樣とするのであるから、必ず著者以上の人に於いては識らるゝことゝ思ふ。然し乍ら普通一般の人々に向つて『然らば神佛の靈驗は如何なる理由に依つて有り得るのでありますか?』と質問したならば『當然のことである、人が神に祈願するから神はそれに對して病氣なら病氣を治して呉れるのぢや。』答への多くは斯んなものであることゝ思ふ。或は著者の見聞が極めて狹ゐから然るのかも知れぬが、嘗て各地漫遊中のこと、此處に何の某と名を記す譯には行かぬが、著者は多くの神官僧侶等の如き、直接神佛に

關係ある人々に對つて、神佛の靈驗ある理由を質問した其答への多くが、前記の種類であつたことを知つて大いに驚かざるを得ないのであつたが、恐らくは斯うした答へ以上に答へ得る人々は相當なる學者識者の外は、極めて少ないことゝ思はれる。

然し乍ら吾々の如きものが、此の神佛の云々と云ふ事を此處に述べるなどゝ云ふことは、神佛に對して眞に恐れ多い事ではあるが、然し有難い現今の言論の自由を許されてある時代であるから、謹んで此れより其理由其他を陳述することゝする。

然らば何うして神佛の靈驗、即ち神や佛に祈願すれば御利益があるか、曰く次ぎの樣である。

神に願ふ、佛に祈ると云ふ人は、必ず其神、佛に對して信仰心を以てゐる(勿

論たゞ人前と云ふ處から神佛の前に掌を合せて平伏すと云ふ人は別であるが）また信仰心があるからこそ、願ふのであり、祈るのである。で必ず祈れば其通りに神様佛様はして下さる、と云ふこれ亦、祈願すると同じ信仰心を以て神佛に對してゐる、それが爲めにこそ神佛の靈驗は現るゝのである。

詰りこれを心理學上から解釋して見たならば、『信仰心を以てゐるから豫期作用が起る。豫期作用が起つた結果として其豫期通りの結果を現はすのである。』斯う云ふものになる。神様や佛様は屹度我々の願ひを叶はせて下さるであらうそうだ必ず叶はせて下さるに相違ない、斯う信仰心を起した結果としてそこに祈願することゝなる、そして何うぞ私の病氣を治して下さい、何うか私の病氣を治して下さる様に切に〳〵幾重にもお願ひ申します、斯う云つて祈る、そう云つて祈つた結果として、そこに『ア、私ア云つてお願ひしたから必ず神様（佛

様も）は私の病氣を治して下さるでせう』『屹度治して下さるに相違あるまい』『ソウダ必ず〳〵治して下さる』と斯う自己の精神中に強く〳〵豫期作用が起るそうした豫期の結果として果して其通りに病氣も治るのである。

然らば神様や佛様は入用はないものであるか、たゞ多くの人々が聚まつてお祭り騒ぎをすると云ふ一種の遊び場所とも云ふべき無用の長物であるか、と云ふに否然うではない、絶對に然うでないことは明白である。と云ふのは、如何に自己暗示と同一種類と視なすべきものが神佛の靈驗だとしても、神佛があつたればこそ、自己暗示が行はれたのであつて、若し斯かる對象物の非存在であつたなら、決して斯かる場合に於いて自己暗示其物は少しも行はるゝものでない。では又それだけのことであるか、否まだ〳〵神佛の必要である許りでなく尙進んでは是非共無ければならぬ理由又それより尙一歩進んでは、神佛の眞に

有難いものであることまでも思はせる種々な事實がある。然し乍らそれ等の事共を此處に說述する必要は認めぬから此處には略して置く。

次ぎには如何にして催眠術の應用に依つて神佛の靈驗ある理由を知ることが出來るか、直接それを事實の上に現す手段方法を述ぶべき順序となつたのであるが、そのことは前說に於いて、既に〳〵了解されたことゝ思はるゝ故、是より直ちに他の問題に說き進めるであらう。

幽靈とは何か

此處には幽靈とは何んなものであるかと云ふ問題から初めて、催眠術を應用して自由に幽靈の實驗なども出來得ると云ふ奇々妙々な事項を說いて見やう。

先づ幽靈とは何んなものかと云ふと、頭の毛が垂れて顏が靑白い、そして白

い着物を着て足が無いから宙を歩く、兩手を前に出して先きの方は、ダラリと垂れて、ウラメシイ〳〵と云ひながらフラフア〳〵と出て來る、とは世間でよく口にしたり書に書いたり、想つたりする處の幽靈であるが、果してそんなものであるか何うか、著者なども想つたことだけはあるがまだ嘗て見たことがないので、非常に見たい〳〵と思つてゐるから、若しも讀者諸君の中で眞に出る處を御存じのお方があつたなら、知らせて貰いたいと思ふ。

それは扨置き、前の樣な幽靈があると云ふ人に『何うしてそんなものが出るのでせう。』斯う云つて問ふて見ると、答へは多く次ぎの樣である。

『幽靈が出ると云ふのは、過去の人々の靈魂がそう云ふ形をして出たり、又は生存してゐる人であつても、時に出ることもあるが、それは生靈と云つて、矢張り其人の靈魂が化けて出るのだ。其靈魂と云ふのは魂のことであつて、魂と

は又言葉を變へて云ふと人の精神である。それ故、他人から餘り殘酷なことでもされると其人の精神は非常にそれを恨む、そしてクヤシイ〳〵殘念々々と深く〳〵思ふ、そして死んでも忘れないなどゝ云つてゐる。其非常に怨みを抱いた精神である魂が遂に前に云つた樣な幽靈となつて現はれるのである。

と斯う云つてゐるが、然らば前に驚くべき精神力の項に於いて說明した如く精神其ものゝ力と云ふものは實に激しいものである故、實際前說の通り、恨み重ねた其精神に依つて、かゝる不思議なる物が現はれるのであらうか、少しくこれに就いて論じて見やう。

第一に精神とは此の場合何を云ふか、精神とは無形の或物を云ふのである。決して有形のものではない。然し乍ら精神は肉と合體して存在する場合に於ては、聲も出す、形も種々と變動もする、けれども其時に於ける精神自身が、斯

く種々と作用する如くにして實はそうでない、精神は只軍隊に於ける上官の如く、學校に於ける敎師の如く、又種々なる團隊等に於ける長たるものであり且より以上に、たゞ命令する敎訓すると云ふ意味のものに過ぎない。それ故何うしても精神自身に於いては影もなく形もないものだ、形が有るとすれば、それは精神でなく、物理學上で取扱ふべき一種の物質である。精神は別に聲も出さぬ、動作もせぬものであることは充分確實に認められる。若し精神其物が聲など出すものであつたとすれば、人の造作することの出來ない精神其物を入れてない蓄音器が聲を出す筈もないではないか。益々精神とは聲も起てねば有形の動作もせぬものであることが確められる。

して見ると、青白い顏をしたり、髮の毛を垂れてゐたり、白い着物を着てる樣な形のあるものは、確かに精神ではないと思ふ。然し一度人體を離れた精神

は、何うあるであらうか、世の中には或は靈魂は何時までも不滅であると云ひ又は肉その物の死と共に其魂も消ゑて了ふなどゝ種々と論ぜられつゝあるが先づ著者の考へを以てすれば、人間の精神（動物のそれも）云ひ換へれば靈魂又は魂と云ふそのものは、例へ肉の死と共に消え失せず何處かに存在するものとしても、決してそんなものとは思はれない、如何に最近科學の文明が、益々不可思議なる無形の或ものゝ偉大なる力の存在を發見し認識するとは云ひ乍ら到底吾々の考へを以てしては、無形である精神其物が、芝居や活動寫眞や、繪畫などで見る樣な、形をしたり、聲を出す樣なことがあらうとは思はれぬ。何故と云ふに、第一普通云ふ處の生靈とか、死靈とか云ふ樣な種々な幽靈は催眠術を應用する時は、何の苦もなく實際に經驗することが出來るからである。

然らば催眠術を應用して如何なる方法手段に講ずれば斯かる幽靈の本性を見

破ることが出來るか、それを說明する前に於いて讀者諸君に參考の爲めに、此處に一つ嘗て以前著者自身の見たる一種の幽靈に近いものゝ實驗談を加へることゝする。

著者は性來特別な好奇心の强い人間である。何でも彼でも凡ての物事に好奇の本領を發揮する、そして時に他人から笑はるゝ樣なこともある。從つて種々とまた冒險的な事などにも大に興味を以て、凡ての物事に當ると云ふ風であるから、鄕里の山中に歸る時、東京から夜中一人で步ゐて行つたこともある、或は駿河の田子の浦に一夜月光をあびて偉大なる自然の風槪を眺め乍ら夜明したこともある。又嘗て飛驒別天地白河の視察に赴ゐた時なども、地人の止むるのも聞かず、人家の更に無いこと六里と云ふ酷い山中で、道路と云つても名のみの險山路を、日の暮れる時山路の上りに着いて、夜半白川村へ着したことなど

もあるが、此處に讀者諸君の參考として加へる事實は次ぎの實話である。

時は去る明治四十一年の盛夏八月廿七日のことであつた。長野縣は東北信の上高井郡で上州白根の噴煙山に續いた米子村の山中に有名な不動の社がある。著者は其不動の社に詣で名高い瀑布や其他の風概に接して大に心身修養の資ともなさうと云ふ考へで以て、明る日は夕まで長野市に出づると云ふ心算の爲めに、今夜深夜を犯して米子の山中に辿り上らうと考へ、須坂町を過ぎて其夕米子の村落を通り貫け、米子不動の里宮を訪ひ一張りの提灯を借り樣として其里宮に到着した。

時に日は全く暮れて地上は眞の黑暗々、空を仰げば雲間の星は點々として其光りを輝かしてゐた、社内を見ると、濛々たる火煙に包まれつゝ泰然たる不動明王本尊の前面には、今しも數多の燈明が連點として恰も日中の如く、一人の

神司は正面に單座して神鼓を打鳴しつゝ連りに經文を唱へてゐるのであつた。著者は共に禮拜しつゝ其經文の讀み了るを待つこと暫時くすると、神司は最後の禮拜を終つて次ぎの座へと移られた。其時著者は旨を語つて提灯を借り度いと云つて賴み入る、すると神司者は、それはお止めなさいと云つて連りに止める。けれども是非共今夜奥宮まで行かなければならぬと云ふとそれを聞いた神官は益々種々と危險や其他を語つて止め樣とする。果ては狼其他の獸などが多く棲息するから是非共明日にしたら良からうなどゝ云つて愈々强く〳〵思ひ止まることを勸められた。けれども遂に何うしても著者の決心の動かすべからずと見て取つたか漸くにして暫時の談判の後、眞紅な一張の提灯は著者の手に渡さるゝことゝなつたのであつた。

そこで著者は途中用意して來た蠟燭を取り出して火を點じ、神官に對つて厚

く好意を謝すと共に嬉び勇んで忽ち山深き不動の奥宮へ向つて發足しやうと、數歩を歩んで社庭を降らうとすると、神官は私を呼ぶ、何かと思つて立戻つて見ると、如何にも眞面目と親切とを面に表はして次ぎの樣に神官は云はれた。

『書生さん何うも危險い樣な氣がしてなりませぬから、何うか不動樣のお經でも唱へ乍らお出で下さい……。』と、

著者はこれを聞いて何となく可笑味を感じたのであつたが、其神官の親切有情な心持を思へば、迚も笑ふ處ではなく、重ねて厚く御禮の辭を殘して愈々それより一人闇路を、山中に辿るべく進んだのであつた。

初めの程は何となく或る冒險小說中の人物にでも成つてゐる樣な氣分がして連りに一種の快感を呼び起し乍ら次第々々に山深く又峰高く辿り進んだのであつたが、一里と行き二里と歩んで、漸次奥山に近付いて歩みを運んで、或は山

の背に佇つて四方を眺めると、空は全く黑雲に掩はれて一つの星の光さへ見えず、遙かに遠く長野市の電燈は神秘的に輝いて仄かに見ゆるの外、眼に映入るものと云つては更に何物も無い眞黑の暗、轟々たる谷川の水勢は脚下から響ゐてすさまじくおちる處を過ぎ、又は細谷川の流れに添ふて行けば邊りは一面に古木茂繁つて足は落葉を積む名許りのホク〳〵路を踏むと云ふ所などを辿つて時に小獸の夢を驚かすやら、幾度か凉やかな谷間の微風に提灯の火を滅されなどして次第に幾分の淋し味などを覺え乍らも、尙勇を鼓して口笛など吹き乍ら進むと、計らずも二頭の狼に出合しなどして流石の强情者の著者も大いに閉口して、暫時は左手に提灯右手に太い枝木を持つたまゝ寄らば一打ちと身構へての立往生に困迷したりなどして其後數丁を進んだ折のことであつた。四邊は只暗黑の大森林の中に樹の葉の數知れぬ積み重ねられた細い〳〵途を歩んでゐ

ると、左手に對つてフト目に付いたのは白い三個のもの、丈は六七尺と見られるそれが宙に立つてゐる、ハッと思つたが心を靜めて見てゐると少し宛動く、そして次第々々に私の方へ近付いて來る。と見ると又遠ざかつて行く樣にも見える。著者は遂に三四分間を立止まつて凝視めてゐた。處が何うも先に行く氣が出なくなつた、果ては髮の毛がゾク〳〵〳〵と逆立樣な氣がして來る。著者は此の時考へた。何であらう一體何がアヽして白い人形の樣になつて動いてまでゐるんだらう。或はこれが狐や狸の仕業ではなからうか、何にせよ此のまゝ見過ごしては行かれない、良一つ化け物だか、幽靈だか狐の變化か、狸の仕業か、それ共他のものか、其正體を見屆けてやらう、恁う決心して躍る胸を心に押へて、左手に持つた眞紅の中に一方には不動尊の印あるを前方にし丑の年の女の奉納した人の印を身に向けた其提灯を突き出し、右手には例の太い手頃の

枝木を糞握りに握り締め、ともすれば浮き立ち相な兩足をどしり〳〵と踏め締め〳〵次第々々に其白い影の方へと足を運んだ、と五六歩進んだ時から白い影は動きを止めた。サア私の勇氣に恐れたのか、それとも寄らば何うか爲やうと云ふ變化の業かと思ひ乍ら尙も次第々々に前へ前へと進んで、益々其白い影に近寄つて行つたが愈々約一間の隔てと思ふ時著者は思はずハハハッと笑ひ出して了つた。と云ふのは變化の正體が解ると共に自からの心の迷ひであつたことを忽然悟つたからであつた。其正體とは何、驚く勿れ苦むした三個の石地藏の立姿が岩山を背にして石段の上に並立してゐたのであつた。それが著者が精神の豫期作用に因つて斯くは動くとまで見えたからである。

其後は差したることもあらず益々山深く夜深き山路を辿つて、遂に米子の里宮よりは道程も四里に近いと云ふ裏道を過ぎて奥の院に着くと、盛夏の候とは

云ひ乍ら冷氣たゞならぬ高山のこととて薄い衣に身の寒さを覺へた、神前の禮拜もそこ〳〵に宿殿の方へと這入り込んだのは既に草木も眠ると云ふ眞夜中に近い十一時後のことで居合せた人々からは大なる驚きを以て迎へられたのであつた。

序に一寸附記して置くが、若しも斯かる場合、漸くのことで止むを得ず恐々ながら歩んでゐた樣な人物であつたとしたならば何うであつたであらう。或は白い影が飛んで來る樣にも見えたらうか、又若し至つて臆病なものでもあつたとすれば恐らく氣絶も仕兼もせなかつたことではあるまいか。斯う云ふ實驗などから見ても、著者は思ふ、世の中に云ふ化物とか幽靈とか云ふものゝ種類は多くは斯かる種類ではあるまいか……と、尙これに類した數多の實驗談などもあるけれど此處には省くことゝする。

愈々此處に幽靈を現す方法其他を述べて見やう。幽靈を現すと云つても別に六ケ敷いことはないのだ、たゞ催眠術上の幻覺や錯覺を應用すれば何のこともなく幽靈を現したり、亦其幽靈と話しをさせることまでも出來るのである。

先づ第一に被術者を催眠狀態に入れることは前々說中に重ね〳〵說き來つた如くする、そして暫時は深く〳〵と催眠させる、いよ〳〵最う此の時と思はれるとき（とは只眞に深い催眠狀態となつてさへ居れば宜敷い）『ソーラ幽靈が出た……コワイ〳〵……ソラ幽靈が何か云ふ……。』斯う云ふ風にさも淋しさうに暗示して次ぎには、聲色をつかつて『ウラメシイー、ウラメシイー……。』などゝ云ふのだ、此の時催眠狀態の心の中には、それを理窟に依つて判斷すると云ふ心作用は少しも無いのであるから、忽ち幻惑を起して成る程と感じる、そして如何にも目の前に幽靈が見えると思ふのである、從つて此の場合は實際そう

と心に思ふため、非常に悲しい夢の幻惑に襲はれた兒供が寐床の中で泣き出す樣に、人に依つては恐しさ淋しさに大聲たてゝ泣き出す樣な人などもある。

此の場合、何か幽靈が物を云ふから話しをしなさいなどゝ云つて、施術者が聲色などゝ話しをしかけたならば、容易に幽靈と話しをすると云ふ奇々妙々なことなども出來るのである。若し亦これを催眠狀態中に於いて、被術者に感じさせる計りでなく、覺醒後、即ち普通の場合などに於いても感じさせ樣とすれば、これ又容易なことなのである。只それは殘續暗示と云つて、醒めてから後まで種々な暗示が効力を現してゐる方法を執るとか又は、人に依つては、別に然うせずとも、只此の催眠中の幻覺醒覺などの利を應用したゞけで充分に幽靈を見させたり、又話しをさせたりする樣なことまでも出來得るのである。然し餘り長い幽靈となつても好からぬから次ぎには、

座ながら千里の遠き事實を識る

と云ふこれ又奇怪至極の事が催眠術の應用で譯もなく出來ると云ふ應用の方法を述べることゝする。

科學の文明は異大なる力を持つて通信機關の發達を促進した。現在も尙促しつゝある。其の結果として生み出された無線電信、無線電話、それ等のものに依る時は、忽ち座ながら數千里外の事實をも恰も目前に見るが如くに知ることの出來得るのは皆何人も知る處であるが、何人も容易く學び得らるゝ此の催眠術に依つて容易に座ながら千里の遠き事實を知ることが出來るなどゝ云ふたなら、誰しも多くはフヽッと笑つて居て取合ぬと云ふのが先づ普通であらう。けれども事實は事實であるから仕方がない、何より事實が證明する。諸君は宜數

く研究を重ねて此の奇々妙々なる事實の實驗を爲し、時に自己又他人の爲に大なる幸福を得たならば著者亦大なる嬉びと爲すのである。

然し乍ら、催眠術の應用に依つて斯かる事が出來得ると云つても、必ず〳〵何時も一度も相違なく出來得るかと云ふに、遺憾乍ら現今の處では出來ると斷言することは出來ぬ、詰り斯かることは、至極少數の被術者に限り、又特別な好都合の場合でなければ多くは完全に成功するものでない、そうかと云つて別に、其成功否成功は如何なる理由に依るか其根據も解らぬのではなからうかと云ふに決して然る譯でもない、けれども此處に其學理を簡單明了に說明すると きと云ふ事は成し難いからそれは他日に讓ることゝして、百發百中とは行かないまでも多くの場合に於いて成功すべき應用の方法に付いて直ちに述べ進めることを致さう。

先づ第一に成可くだけ暗示感應性の强烈なる被術者を求め、場所柄としては內外共に至極閑靜なる箇所を撰んで、徐かに被術者を催眠の狀態に誘導くのである。

で種々と暗示の効力を正して見る、例へば『君の手は次第に上方に上つて行く。』などゝ暗示して上つて行くか何うかを見る、又『其の手は宙に止まつて了ふ。』などゝ暗示して其暗示通りになるか否かを見る。と云ふ風にする。そして凡ての暗示が完全に行はれると認めたならば、數分間を其儘打捨て置いて樣子を見る。そして何の變化も起らないと見たならば愈々突然次ぎの暗示を與へて被術者に幻覺を起させるのである。

『ソラ君は今飛行機に乘つてゐるのだ……飛行機は今頻りに太平洋の上を西に〳〵と飛んでゐる。……オヽモウ此處は印度洋の上である。向ふに見えるのは

歐洲大陸だ。……ヤア實は激しい勢で飛行機は飛ぶ。……オヽモウイギリス海峽の上に來た……オウそうだモウ倫敦市街の上だ……。』などゝ云ふ暗示を與へて次第に被術者を遠方に導くか、乃至は、最初に突然、『オヽ此處は米國ニユウヨークの何々教會堂だ、教會の中では今人々は何をしてゐるか良く見なさい……。』などゝ云ふ暗示を與へて幻覺を起させると云ふ風な方法で、被術者に何處なら何處と定めて置いた箇所を見させるのである。

此の時注意すべきことは、覺醒させる時に當つて、『今君は見聞したことの一切を好く覺へてゐる眼が醒めた後も全然記憶してゐて話すことが出來る。』斯う云ふ意味の暗示を忘れずに與へることである。

斯くする時は、被術者は催眠中に經驗した一切の事共を記憶してゐて、眼を醒した後、全然實際眼前に見聞した樣に話すものである。

然し斯かる實驗を仕樣とするには相當に熟練も要する。又被術者の如何に依つては大いに凡ての智識も必要なのであるから、讀者諸君は成可くだけ凡ての事物に關して研究もし、經驗もして大いに自信力の養成も叶つてから實驗すべきものであると思ふ。

喰はずして滿腹し飲まずして醉ふ方法

吾々人間は一日として喰はずにも居られず、若し例へ一日なりとも喰はずに居つたならば、腹が空いて堪まらなくなるのであるものを、此處に喰はずして滿腹し飲まずして醉ふ方法だなどゝ云つたなら、これも大いに人々の笑ふ處であらう、『ソンナことが出來るものか、若しそんなことが實際出來るとしたならば、たれも食物を喰はなくなつて了ふとまで行かなくも都合に依つて少し位は

喰はずにも居る、何でそんな馬鹿げた話があるものか。』と云つて、直ちにケナして了ふであらう。が驚くことなかれよ讀者諸君、現に斯かることが出來得るなり。とは此處に著者の眞面目に記し度いことである。兎に角本項を熟讀したならば、讀者諸君に於いても必ず喰はずに滿腹することも出來、飲まずして醉ふことも出來るのであるから、讀者は熟讀研究して時に米や酒の不足の場合などには、人にも施し、又自らも其應用に依つて喰はずに滿腹し、飲まずして醉はれたならばこれ又好都合至極ではあるまいか。

新約全書の一節を記せば左の記事がある。

『時既に暮方になりければ其の弟子彼れに來りて云ひけるは、此處は寂寞とろにして時も既に晩し、衆人の食ふ可きものなきが故に其自ら四邊の鄕村に行きてパンを求めんが爲めに彼等を去らしめ給へ、イエス答へけるは汝等こ

れに食を與へよ弟子彼れに曰けるは我儕行きて銀二百のパンを買かれらに與へて食はしむべきか、イエス彼等に曰けるはパンは幾干ある往きて見よ彼等見て其數を知り五ツのパンと二ツの魚ありと答ふ、イエス衆の人を組々にして青草の上に座らしめよと命じければ、或は百人或は五十人宛列座せり、イエス其五ツのパンと二ツの魚をとり天を仰ぎ謝してパンをわり弟子に與へて人々の前に列しむ又二つの魚を人々に分與へぬ、衆人みな食ひ飽き、そのパンと魚の餘屑を拾ひしに十二の籠に盈たり、パンを食たる男おほよそ五千人なりき。(マコ傳第六章三十五節より四十四節まで)』

同書の中には此の外にもこれと同種の記事が澤山見える。

これに依つてこれを見れば、彼のイエスキリストは二千年に近い以前に於いて既に今著者の此處に書かうとすることゝ同一種類のことを行つてゐた

何故かと云ふに五ッのパンに二ッの魚が、何うして五千人と云ふ多數の人々に食はせることが物質上出來よう、又其食つた餘りの屑が十二の籠に一杯であつたと云ふに至つては尙更ではないか、思ふにイエスキリストは、たゞ多くの人人に精神的に食はせたのであらうと思ふ。處で今此處に催眠術を應用すればこれと殆んど同一の現象を觀ることが出來る。それは次ぎの樣である。

催眠狀態に在るものに向つて、今君は其通り美味いものを食べてゐる、オヽモウ大分お腹が充分になつて來た。……眼が醒めた後君はお腹が充滿で堪まらない……。」などゝ暗示して見給へ、感應性の强いものであつたならば眼が醒めて後、

『ハテナ自分はお腹が充滿くつてたまらない。』などゝ云ひ出す。君は何か食つたのではないか。などゝ云へば、

『さうだ何か食つたのだつた……。』

などゝ云ひ出して隨分施術者までも笑ひ度くなる樣なことなどもある。

又これも充分な催眠狀態に在る人に向つて、

『サア君、君の好きなビールを飲み給へ。これは隨分良いビールだ。……サア〳〵モット飲み給へ。……ア大分醉つて來たな。……君は眼が醒めたならビールの醉ひで忽ち又眠くなつて寐て了ふ……。』

などゝ暗示して水でも與へたならば、忽ち被術者は見る〳〵生理的の變化も來して、如何にもビールに醉つたらしくなる。そして眼を醒ましたならば、又遂に横になつて寐て了ふものである。

これに依つて讀者諸君も私の書くところの奇なる、食はずして滿腹し飲まずして醉ふ、と云ふ問題の僞りでないことを悟られたであらう。

著者は嘗て恁んな經驗がある。

著者の處へ或る一人の青年が來て互ひに種々と談じた結果此の食はずして滿腹し飲まずして醉ふてふ方法の催眠術に依つて行はるゝことを話すと、ナニソンナことがある筈はないと云ふ。著者は何處までも出來ると云ふ。遂に暫時の後は然らば實驗せんと云ふことになつた。

此の時著者は立會人を求めて其目前に、前記とは反對に喰はせると云ふ方法をとつた。實際に其青年に三盃の御飯を喰べさせた。後眠を醒まさして君何を喰つたと云ふと、

イヤ何も喰はないと云ふ、ではお腹は何うだと聞くと、青年は曰く、空腹で堪まらないと云ふ、然うかそれでは先づ飯を喰つてから語らうと云つて共に御飯を喰べることにした。すると青年は又四盃と云ふ大飯を喰つてケロりとして

ゐる、又お腹は何うだと云ふと、モウ良い澤山だと答へる。君は先きに三盃も喰つて置いて、少しも喰べない、空腹で堪らないと云つたから今度もまだ空腹だらう、と云ふと立會人は遂に大口開いて笑ひ出して了つた。で青年は不審さうな顏をするので、何うだと云ふと、實際私は先きにも喰つたのでせうかと云ひ出した。又立會人も著者も共に其言葉とお可笑な顏付とに遂堪え兼ねて笑ひ出して了つた。遂にして其結果は全く青年が喰つたことを知らないと云ふことに成つた。そこで著者は、青年に對つて、其通り喰つたことを知らない位だから、又反對に喰はせないでも喰つたと思はせてお腹の充分なことを思はせることが出來ると語ると、遂に青年は成る程と感服したのであつた。これを自己催眠に依り自己暗示に依つて行ふ時は、即ち自から喰はずして滿腹の人となり飲まずして醉ふた人となり得るのである。

（然し此のことも如何なる被術者にも何時でも行はれると云ふ譯には行かぬことを斷言つておく）

又此れに類した種類の事は、普通平常の事の中にも澤山ある。例へば友人と熱心に何事かを談じてゐた結果夕方になつて漸く午食を濟さなかつた事を想ひ付いたとか、又は酒飲みが、醉の後二度三度も晩食をして翌朝云ふと、知らなかつたと云ふ樣なのも所謂此等と同一種類なのである。

尙此のことに關しても種々と說き度いのではあるけれど、既に紙數を越へてゐる爲めに遺憾乍ら他日に讓ることゝする。

又此の不可思議なる現象等の解決としての應用法に關しても說明したいことは山々あるのであるけれど、これ又、紙數の都合上略することにするのであるが、兎に角、世の中に有る種々なる多數の不思議とか奇妙だとか云ふ風な事

柄は多くは人間の精神作用に依るものであつて、其他又物理上の理由に依つて現はるゝことも尠くないが、此の精神作用と物理學上の智識とに依つて解決を求めたなれば、多くは不思議でも何でもなく、反て成る程これでは當り前のことだと想へる樣なものが多いのである。去れば讀者諸君に於ても大に研究經驗の効を積んで百般の不可思議の解決等をなし、世の多くの迷へる人々に示したならば良いであらうと思ふ。

但し第一に說いた神佛の靈顯云々等に就いては一般の人々には云はぬ方が反て諸君の爲めになる場合の多いことを斷言つておく。何故かと云ふに半可通の考へを以て、愚人に說いたならば、其理を徹底して說くことの出來ぬ爲めに反て大なる誤解を生じて、言者も又大いに困迷さざるを得ない樣な場合も少なくないからである。

幸福増進策として家庭に於ける應用法

此處には問題に示せる如く幸福増進策としての各家庭に於ける應用の方法を述べて見やう。如何なる方法を以て催眠術の應用に依り如何様なる家庭に於ける幸福の増進が計られ、如何に人生の上に益することが出來るであらうか、大いにこれ比として萬人の注意して研究すべき問題であらう。

昔しから浮世は儘ならぬものと云ひ、または『儘にならぬが浮世の常習。』などゝ云はれて、人生は始終不平不滿に包まれてゐるもの丶様、一面の人生觀となつてゐる様であるが、眞に然るものであるらしい。此の世をば我世とぞ思ふ云々など丶如何にも世の中が思ひのまゝになる様なことなどを云はれた人などは著者の廣からぬ淺い見聞には世界の人類中日本の藤原氏にたゞ一人有つた計

りに思はれる。

そして何時も〳〵拾何億と云ふ人類は、不平や不滿や不充實やらに世を送り日を重ねて居る様であるが、著者の考へとしては極少數の者を除くの外、それが悉く第一に家庭の不平和などに遠因し原因して斯く成つてゐるのではなからうかと思ふ、若し然うでなかつたとしても、人間が一生の中に比較的多くの時間を含まれて有るべき家庭其ものゝ、平和に圓滿であつたとしたならば何れ程人生の幸福を増進することが出來るでせう。必ずや多數の幸福に嬉ぶ人々を作ることが叶ふと思ふ。去れば現在平和にあらぬ家庭を有するものであつたなら申すまでもない事、若し現在に在つては圓滿な家庭、平和な樂園に樂しく暮らしつゝある方々と雖も、人生の幸福増進とし、又家庭内の幸福増進策として充分研究して參考に資せられべきであらう。